救助隊ホッパーズ

ろっくまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
救助隊ホッパーズ

【Ｎコード】
Ｎ７２７６Ｌ

【作者名】
ろっくまん

【あらすじ】
ここはポケモンたちだけが住んでいる世界。このお話はそんな世界の、ある救助隊のお話。

ロストタウンにて（前書き）

少し文体を変えました。ストーリーも少し前と変わっています。

ロストタウンにて

太陽がじりじりと輝く。

ポケモンの住む星には今日も太陽が真上にやってきた。

「…どうしよう」

そんな太陽を眺め、キョロキョロとあたりを見渡すヒトカゲがいた。

身体にかばんをさげ、そこから木刀がのぞいているヒトカゲだ。

ヒトカゲといってもまだ身体は小さい。尻尾からあがる炎も、勢いを感じなかった。

しかし、鋭い眼光は持っていた。一日ではもてないものを。

そんな野郎は挙動不審に周りを見てつぶやいた。

「迷っちゃった」

ため息交じりの声の主の手には地図が握られていた。

この地図は、今ヒトカゲのいるポケモン救助隊激戦区であるロストタウンだ。

ポケモン救助隊は、そのなのとおりポケモンを助けたり、クラボのみを届けてってパシられたりする一種の職業だ。

そしてここロストタウンには救助隊がたくさんその辺にいるし、基地もめちゃくちゃある。

右を向けば救助隊基地でできた壁。左を見ても救助隊基地でできた壁。

前をみればトンネルのように囲む救助隊基地。後ろをみればもうわけわからん。

外装はぼろいアパートを改造したものや、どこのお城？ってかんじの豪邸とかある。

この町をねり歩いているやつは刀をもったやつだとか、銃をもったやつだとか、誰かの首もったやつだとか、

このヒトカゲの装備は、木刀に小刀、と普通に考えれば銃刀法違犯でアウトなんだがここではあまり目立たない。

「う～ん、まいったな～。ほんとまいったな～」

周りの雰囲気に恐れて声が自然に震える。しかしこいつはさっきから一人言が多いのでは？と思うが気にしない。

「へいへーい！兄ちゃんお困りかい？」

横から急に声をかけられる。ずささささと、現れたのはなぞのパッチールだった。

そう、ここの町は砂で作られた道。舗装されていない。なのでずささささと音がするのだ。

ヒトカゲはラッキーと思い、道に迷っていることを伝える。

「あ、実はここの救助隊に入りたくて…」

パッチールの横に立ち、地図を見せる。

パッチールは思ったよりも背が高かった。

だから、太陽のかげになり、にやけた面で見下ろされるととても恐い。

「あーハイハイ。この救助隊はね、ホッパーズだね。」

地面にタンを吐きながら言うパッチール。

よくみるとふけがちらほらと肩にかかっている。

「うん」

顔をひきつらせながら答えるヒトカゲ。

ヒトカゲは１２歳の子供なので、子供でも入れる救助隊を探していた。

しかし、まだ子供に過酷な依頼のある救助隊にすんなり入れるわけ

ではない。

救助隊だって依頼が入らなかったら金欠だし、そんなに人数を増やしたら一人の給料が減ってしまう。

だから、容易に仲間を増やせないのだ。

しかし、この救助隊ホッパーズは副隊長が気に入ればＯＫという風に書いてあったので、こうして出向いてみたのだ。

「で、ここに行きたいわけねハイハイ。だったら」

すっと拳をかまえるパッチール。なんだろうとヒトカゲは拳を見る。

「だったらここで俺と勝負じゃあ！！」

「くらえ火の粉！」

なんのためらいも無く、ヒトカゲは火の粉を吐く。

「ぎゃああ目がぁあぁ」

ヒトカゲの火の粉がパッチールを襲う。特に目。目っていうかあのぐるぐるまきのアレ。

「貴様あああああ！！」

パッチールが拳を構えて突進してくる。

周りにエネルギーがたまる。

ヒトカゲはさっとかばんから、ガラガラのかぶるものみたいな兜を出す。

それをかぽっ、と自分の頭にかぶせる。

かぶると本当にガラガラに似ているが、武器は骨ではなく木刀だ。

（ここで戦うのはいやだけど…）

パッチールの拳にはひよこが飛んでいる。ピヨピヨパンチだ。

それをヒトカゲの腹をめがけて殴ってくる。

ヒトカゲはあわてて後ろにしりもちをついてよけた。

拳が空を切る。

急いで木刀を倒れた状態で構える。

「心眼流”炎剣”！」

掛け声とともに木刀の周りが発火する。

それに脅えるパッチール。

そのすきに立ち上がり距離をとろうと半歩下がる。

が、パッチールがその下がる瞬間に間合いをつめてくる。

「ぐっ」

フレアは炎を纏わす剣を構え、威嚇する。

その構えた剣に向かってパッチールがピヨピヨパンチをはなった。

（んぐ！？）

炎に躊躇なく攻撃をしかけられ、木刀がはじき返される。

が、ヒトカゲからは行動を起こさない。きっとパッチールは自分の拳をやけどしただろうと。

また半歩下がる。

だがジャストタイミングで腹にピヨピヨパンチが放たれた。

「あ」

激痛に身体を押さえるヒトカゲ。

「おいおい、エネルギー不足だぜ兄ちゃん」

ピヨピヨパンチをした拳をひらひらして言うパッチール。

その手には火傷もくそもない。

「火の勢いもよえーぜ。やけどどころがダメージもねえ。まだまだあまちゃんだぜ？ここに来るのははえーよ」

ヒトカゲに距離をつめ、見下ろしながら言うパッチール。

が、そんなことには気づかない。ヒトカゲは混乱状態でそれどころはない。

頭にひよこが浮かんでおり、目は渦を巻いている。

それをみてパッチールはふん、と鼻で笑うと来た道をずるずる帰ろうとする。

「待　て」

パッチールが声に振り返るとメガトンパンチが顔面にめり込んだ。

パッチールはしかし驚かない。この町はストリートファイトは上等

だった。

さっきヒトカゲをなぶっていたので、挑戦者でも来たのか、と他人事のように考えるパッチール。

彼は急いで後ろに走り、相手を見る。

しかし、そこには混乱状態のヒトカゲしか見えない。

はっとなって周りを見る。

そこできがついたがざわざわとギャラリーが集まっていた。

「おらぁ！」

背中に衝撃が走る。しかし、パッチールはそのまま相手の腕を掴む。

後ろ向きでも耳がいいパッチールには相手の腕の位置が分かる。

ところがこんどは相手の腕を掴んだ自分の手がけられる。

手がしびれ相手の腕を放してしまい、まえぐらみになり倒れた。

そのまま前転をするかのようにして立ち上がり、相手に背を向けながらピヨピヨパンチをためる。

相手が近づく様子を耳で捕らえる。

あと3歩近づいたら自分と約3メートル当たりにくるだろう。

そこで勝負。

やられっぱなしじゃいらいらするので仕返しだ！

勢いよく後ろを振り返り、ピヨピヨパンチを繰り出した。

相手を認識する前に。

はなったピヨピヨパンチは硬いなにかに当たった。

パッチールは気づいた。これは相手の拳だと。

相手は拳で防御したのか。器用な奴だ。

「おい、おめー」

相手が話しかけてきた。

「俺の客になにしてくれてんだ」

ばちんとパッチールは相手の拳をはじく。

息を切らし、あいてを見た。

相手は、ルカリオだ。

しかも、こいつ、

あのヒトカゲが入ろうとしていた救助隊、ホッパーズの副隊長だ！

なるほど、だから戦いを申し込んでき―

油断をしたところを捕まえた。ルカリオはこう思った。

あのくそパッチールが俺の顔を見ようとしたとき、電光石火で後ろに移動して脳天ぶん殴ってやったぜ。

にしても、たしかにここはがきのくるところじゃない。

俺だって大人だ。そこはわきまえてほしい。

すっかり混乱しているヒトカゲを俺は背中に担いだ。

帰るぜ、キル。入隊希望者は見っけた。

後ろで呆れ顔で見ていたキルリアにそう声をかける。

キルリアはうなずくとテレポートを始める。

「いや、それにしてもなんで」

ルカリオはヒトカゲの顔を見た。

今は気絶したのか意識がない。

いちおうヒトカゲのバックを、もってきたが忘れ物はないだろうか。

そんな心配はいいや、と思いつぶやいた。

「なんでこいつは戦おうとしたのかね」

レン（前書き）

文体とストーリーを前と少し変えました。

レン

救助隊ホッパーズは、知名度は中の下だろう。

それは、まだ新しい救助隊だったからだ。

基地はおんぼろのアパートの一部屋を借りている。

それなのですごく狭い。１ＬＤＫだ。

そこに帰ってきたルカリオは担いでたヒトカゲを来客用のソファに置いた。

居間の中央にテーブルがあり、その右側にソファがある。

居間にテレビはなく、本当に地味な家だった。

それもしょうがなく、依頼が少ないためだ。

キルリアのキルはヒトカゲを起こそうと懸命になっている。

ルカリオはキッチンに行き、冷蔵庫を開けた。

なにかないかなと探したら、なんかの木の実のジュースのペットボトルを発掘した。

まだだれも飲んでいないようなのでラッパ飲みをした。

ふう、と一息ついたところで誰かがルカリオの肩をつついた。

それはクチートだった。

このクチートは救助隊ホッパーズの依頼の管理、お金の管理、飯作ったり買ってきたりと雑用するやつだ。

ルカリオがこの基地に無理やり入ったときにはすでにいたやつだ。

さらにこいつはとても無愛想でしゃべろうとしない。

雑用してくれるのはありがたいがポケモンとしてはどうかと思う。

そのクチートがルカリオの飲んでいたペットボトルをひったくった。

ルカリオはなんだなんだと思いながらもクチートの様子を見る。

するとクチートはある数字の羅列したところを指差してルカリオに見せた。

「なんだよ、それがどうし…」

賞味期限だが消費期限だかわからないが、確実に5年前のものだった。

さーっと血の気が引くのが分かった。

多分、今、俺、すごい顔してるんだろうな、と思った。

次の瞬間トイレへ電光石火でいった。

トイレから出ると、ヒトカゲがすでに起き上がっていた。

「あ、どうも」

結局吐けなかった俺はヒトカゲの様子をじろりと見る。

幸い、まだおなかは壊してない。

「で、名前は」

俺は聞いた。

「フレアです」

うん、まあしっていたけどね。

俺は答えた。

今日、電話があった。

そっちの救助隊に入りたい奴がいて、で、そいつ方向音痴だからそこんとこよろしく、ってきて、

なんだよ、お前。命令すんじゃねえって返したら、

名前はフレアっつうからよろしく。あと、そいつけっこう金もってるらしいよ、

ってなった。俺はじゃあ金だけ奪えればいいやとフレアを探しに行った。

しかし、クチートにしらべてもらったところ、フレアとはまだ１２歳のお子様だったのだ。

俺は保護してから金をとるという作戦でこう、出向いたのだ。

で、今こうやって成功した。

あとはお金をいただくだけだ。

ここであせってはいけない。どうにかうまい方法で金を奪い取りかえってもらう。

俺は思考をめぐらせた。

助かった、とヒトカゲのフレアは思った。

それもこれもマノ君のおかげだな。

もともと、なぜヒトカゲのフレアはこのマイナーな救助隊を知ったかと言うと、説明は長くなるけどまあいいや。

ヒトカゲの通っている小学校の６－４の委員長のマノ君ことメノクラゲにフレアは僕でも働けるところある？と聞いたら

「だったら、救助隊？かな。有名なのは、プクリンのとことか、フレアーズとか、斬、とか？」

と言われた。

プクリンのとこ、というのはプクリン親方がやっている超つええ救助隊だ。

団員数がはんぱなくいる。ここから派生している救助隊もある。

フレアーズは団員数が3人しかいないが、プクリンの救助隊の次に強い救助隊だ。

斬、という救助隊も人数がかなり多いらしいと聞いたことはある。

フレアはそんな超有名な救助隊の名前をならべられなぜか赤面した。

「いやでも子供は入れないよ。もっとマイナーなところじゃないと」

そんなフレアを察してか、すっぱりとマノはそういって机のなかから本を取り出す。

題名は、２０００年版救助隊一覧。

「ねえ、マノ君。その机さ、昨日ギネスブック５冊とジャ○プ２冊と参考書２１冊無かったっけ？」

ちなみにジャ○プが2冊というのは、あれ？先週ってどんなかんじだったっけ？という人が多いため先週のも持ってきていたマノであった。

「僕はね、大体今日はどんな人が何を借りるのかわかるんだ」

本をぱらぱらさせながらあっさり答えた。

それにしてもその机を見たフレアもどうかと思うし、参考書を２１冊かりたやつもどうかと思う。

「あ、これは？」

ぱっとあるページをフレアに見せてきた。

「救助隊ホッパーズ？」

さっぱり聞いたことのない救助隊にフレアは思わず聞き返す。

「条件がいいんだよ。気に入れれば入れるって」

あいかわらずそっけなく答えるマノ。

「気に入れば？なんだよそれ」

適当なかんじに子供のフレアも呆れる。

この救助隊ではたして大丈夫なのか、いや、でもそんなわがままはこいつは言ってられない。

「給料はめちゃくちゃだ。お金が入ったら、だって。隊長はヤミラミのルーズ、副隊長はルカリオのレン。電話番号はあるけど、教える？」

「いや、いいよ。僕の家電話ないから」

ところでフレアの家はアパートの2階あった。ヒトカゲの家は理由が分からないが母親がいない。父親は最近死んでしまった。それも理由が分からない。

おかげで、お金が少ししかなくなってしまったので無駄な家電は全て売ったのだ。フリマで。

ちなみに、父親についてはある日、夜になったらヌマクローいきなりがやってきて

「君の父さんは残念ながら死んでしまった。これを、渡します」

そのあとはよく覚えてないがヌマクローはどこかへいってしまった。

渡された封筒には５０万ポケ―（１ポケ＝１円）と、父親が書いたと思われる手紙が入ってた。

「わかった。じゃあ地図を描いておくよ」

マノは地図をざら版紙に書き始めた。

「ありがと」

表情は笑顔だった。しかし、マノは鋭い。

「なんか不安でもある？」

フレアは急にしょんぼりした。

「僕が、気に入られるかな」

クラスでは、フレアは活発で目立つポケモンだった。

しかし、それは周りが純粋なポケモンたちで、同年代で、フレアの負っている過去をしったクラスメートだったからだ。

だから、それが一番心配だった。

僕ははたして井の中の蛙で満足しているだけなのか、と。

「大丈夫だよ。だって、フレア君はなんか武道、やってただしょ？」

そこはふれないほうがよかったかな、と思ったマノは反省してフレアを元気つけた。

「ああ、うん。剣道なのかな？心眼流って言ってさ。お父さんと兄ちゃんに習ってたんだ」

今はお父さんはいなくて、兄と二人暮らしだが。

「ほら、地図書けたから、もってきな」

マノはフレアの目を見る。

しかし、全く何を考えているか見えなかった。

「あ、うんありがと」

そう笑顔で言ったフレアはところで、思った。

（地図ってどうやってつかうんだ？）

入隊（前書き）

文体とストーリーを前と少し変えました

入隊

「で、まあ僕は兄ちゃんと今二人暮らしで」

フレアは今必死に副隊長であるルカリオのレンに気に入られるように自分の事情を説明している。

場所は、ホッパーズ基地のソファ。そこにフレアが座る。

フレアの隣にキルリアのキルも座ってる。

そしてフレアに向き合うように唯一のテーブルにでん、と構えて座るレン。

フレアが説明したことは、おやがいないこと、兄と二人暮らしのこと、兄もはたらいていること、予防注射はなかないことなどなど。

「もうお父さんがくれたお金もなくなってきちゃって、でも兄ちゃんは自分が働くからといって…」

フレアの兄はタツベイだった。高校生なのだがそうやって弟の面倒もみないといけないのであまり学校へはいかずアルバイトをしてい

る。

そんな兄に申し訳ありまくりのフレアはこうして救助隊に入ってお金を手に入れようとしていたのだ。

ちらちらとレンの顔色を伺う。が、とても見せてくれない。

手で顔を覆い隠している。

そしてズビッ、グヘッ、と鼻のすする音がする。

そしてぽたりぽたりと涙が落ちる。

「あの…」

てっきりフレアは自分のことに同情しての涙なのかな、と思ったが、次に聞こえた言葉は

「おなか痛い…」

だった。

どうやら、あの賞味期限だか消費期限切れのジュースがおなかをぼっこぼっこにしているようだった。

「ん」

あきれ顔でキルはレンにたまたま救急箱で埋まっていた胃腸薬を引っ張り出し、水も用意して渡した。

「どーも」

それをわき目も振らずのみまくるレン。

やがて飲み干したあと、まるで遊びにきた友達に「トイレ使いたい？めんどくせーな、ま、いいよ」みたいなノリで

「で、ホッパーズに入りたい？めんどくせーな、ま、いいよ」とレンが言った。

このとき、フレアは思った。

救助隊の入隊って、もっとちゃんとしたやつじゃなかったっけ？

そしてレンは思った。

こいつほんとはそんな金もってなかったじゃん！！

その後、なんやら書類やら名前かけやら年齢なんやらとめんどくさいことをいろいろとした。

鉛筆で全て答えるフレア。

そんな格闘が１０分で終わった。

クチートがパソコンでカタカタしたり、キルがテレポートでどっかいったりとフレアの入隊のために忙しくしてるころ、

レンは堂々とソファにねっころがっていた。

フレアも、やることがとくにないので、一番この救助隊できになっていたことを話した。

「隊長のヤミラミはどこですか？」

たしかにそう書いてあった。救助隊一覧に、隊長はヤミラミだと。ルーズだと。名前からしてルーズだと。

「う～ん、どっか修行しにいった」

どうでもいいように答えるレン。

問い詰めたかったが、これで嫌われたらどうしようとおもった。

レンはそうそうと付け足していった。

「あともう一人隊員いるよ」

フレアはまた興味がわいた。

フレアの性格はほんと明るい。

人見知りなどしない。

だから、あってみたいとおもっていた。

「ま、どっかそいつも遊びにいったらしいけど」

なんだか、しまりのない救助隊だなあ、とフレアの不安は増すばかりだ。

やがてキルが救助隊の証であるスカーフを持ってきた。

救助隊といえばこのスカーフだ。

すこしうれしくなって尻尾にスカーフを巻く。

そういえば、レンだってキルだってスカーフをしていない。なんでだろうか。

「おし、じゃあお前もこれからホッパーズの仲間入りだ」

今までの話をしめるように言ってレンはそのまま立ち上がる。

「あ、そういやあお前住むとこなかったらここにいていいから」

まさしく立ち上がるときに、そういえばとどうでもいいふうに言うレン

が、確かにそういってもらうとありがたいとフレア。兄とまだこの話をしていない。

だからまずは兄と相談してどこに住むか決めることにした。

…まあ金はこいつをうまく働かせてかせぐか。

レンはフレアが実は貧乏だったことにとても腹を立てた。

これじゃまたよけいに金が減っていく。

いらだったままクチートのところに歩いていき、

「なあ、依頼あった？」

と、パソコンを除きながら聞く。

するとクチートはうなずいた。

レンがすこし顔を近づけた。

「どんなやつ？」

クチートは掲示板を開く。

そこに救助隊ホッパーズ名指しで依頼が来ていた。

クチートがまたうなずく。

レンは画面をよく見てみる。

内容は、モモンのみ１００個をある企業に届けてほしいとのことだった。お礼は５万ポケ。

まあ、悪くない。

モモンの実１００個となれば、自然に実がなっているところ…たしかこのへんにモモンの実の森があったようななかったような。

キルがいつのまにかレンの横にきていた。

「キル、どっかモモンのみがたくさんなっている森知ってる？」

キルは「まあね、」といったが

「うち、モモンのみきらいだから送ったらすぐかえる」

とも言った。

「まあいいさ。じゃ、そのうちあとで向かえきてくれ」

玄関へゆっくり歩く。フレアに声をかけながら。

「え、え？」

フレアはあまりに急なできことに混乱している。

依頼があるならやることにこしたことはない。

思い立った日がなんとやらだ。

「いいから外でるぞ」

キルが後ろから着いてくる。

外に出る。

レンはキルにテレポートするよう促すと、キルのまわりに紫色のエネルギーが集まっていく。

「フレア、いくぞ。お前の初仕事だ」

フレアの表情を伺おうとそういいったとき、

3匹はテレポートでどこかへ飛んでいった。

ｖｓカイリキー

キルのテレポートである場所についた。

足が地面についたその瞬間フレアは吹き飛ばされた。

「！！」

後頭部をやられた。レンがやったとことまったく同じ。

反射的に転がりながら兜をかぶり自分がさっきいた場所を見た。

数メートル先にレンとキルにカイリキーとグレックルがいた。

場所はきっとここは森らしきばしょ。

カイリキーの腕１本が突き出されていることからフレアを殴ったのはこいつだった。

だが今フレアは頭がずきずきして何も考えられない。

「フレア！」

キルがこちらにかけよってくる。

「おい、なんだテメーは」

カイリキーがいった。

が、レンがすかさずカイリキーの上にはどうだんをうつ。

ちなみに今二人の間は5メートル前後。

そのはどうだんはある程度空中までつきすすんだあとすぐにカイリキーのところまで急降下してやってきた。

それをカイリキーは2本の腕で受け止める。

「テメッ、きいてんのか」

視線をレンがいた場所に戻すとそこにもうやつはいない。

気配を感じてすぐしたを見たらレンがアッパーの構えをしていた。

「スカイアッパー」

（はどうだんは布石か？）

あわてて2本の腕でアッパーの拳をとめようとする。

「はっけい」

後ろからこえがした。

びっくりしてふりむこうとすると同時にはっけいに吹き飛ばされた。

「バーカ、かげぶんしんだよ」

アッパーを構えていたレンは実はかげぶんしんで、消えてしまった。

うしろに回り込んではっけいをうったほうが本物のレンだった。

「どくづき」

横からグレックルが拳を構えてやってくる。

しかしそれはキルのエスパーの銃で受け止められる。

「いて」

エスパーはきいたようだ。グレックルは顔をしかめる。

「ようかいえき」

口をあけてその場でぐるぐるまわりだしたグレックルは口からようかいえきを振りまく。

「みきり」

レンがみきりでかわす。

「ひかりのかべ！」

キルはひかりのかべでかわす。

「かわらわり」

キルに接近してかわらわりをはなつグレックル。

すかさずキルは銃を上に投げて上げた。その瞬間銃はバッと消える。

「テレポート！」

銃が消えた場所から今度はゴッツイバズーカが出てきた。

「くらえ」

カチと引き金を撃つととても大きいエスパーの塊がでてきた。

が、グレックルはそれをかわらわりで相殺する。

「じしん」

後ろでレンが地面をたたきつけようとした。

「フレア、飛べ！」

キルがフレアに手を伸ばしそのまま引っ張る。

そのままキルがサイコキネシスで2人を浮かす。

グレックルは軽くジャンプしじしんの衝撃波をよける。

「でんこうせっか」

レンがいっきに電光石火でグレックルの真下に入る。

「まもる」

グレックルが空中で緑のバリアーを放って守ろうとする。

「スカイアッパー打とうとしたろ」

自信まんまんに言うグレックル。

「じゃあフェイント」

レンは目にもとまらぬ速さでグレックルのまもるをとき、びっくりしているグレックルの腹に一発を入れた。

「ぎゃ」

そのままグレックルは後ろに飛んでいき木にぶつかって倒れた。

「お前、それ本当にただのフェイントか？」

「ああ、そうだよ」

グレックルは自分のましたに嘔吐した。

「じゃあなんでこんなに威力が強いんだ？」

「お前らが弱いんじゃないの？」

そのままグレックルは気絶した。

このときフレアはレンの強さにぼんやりしていた。ていうかこのカイリキーたちは誰？

反省会やらミーティングやら

「うそつけ、ただのフェイントじゃねーよ」

キルがフレアを抱えてやってきた。

「おれにとってはただのフェイントだよ」

フレアが自分で立ち、聞いた。

「でも、僕のぴんとレンズにはレンの周りになんかオーラみたいなのが集まって見えるけど」

「そうだよ、それがレンの強さだよ」

キルが言った。

「ああ、こいつは”覇”だよ」

「覇？」

フレアはその言葉をお父さんから聞いていたような気がした。

たしか自分の周りにエネルギーをまとわりつかせ、常に攻撃力と防御力をあげる技だ。

簡単にいえば目に見えない鉄のよろいを着ているような感覚だ。

しかし、それは常にまとわりつかせるのでエネルギーを消費するから簡単には使えないはずだ。

「あ、知ってるんだ。なら説明はいいな。じゃあキル、お疲れ」

「ああ。もしようがあったら呼んでくれ」

キルはテレポートで帰っていった。

「というより、あの人たちは誰？」

横でのびているカイリキーとグレックルをさして聞くフレア。

「たぶんごろつきじゃないか？危険区域は基本な法が入らないしさ、ここらは地理的に危険だったんだけど、きっと食料調達にきたんだろ」

「あの、レンお願いがあるんだけど、今の戦闘の解説してよ。速すぎてよくわかんなかった」

「ああそうだな。お前もつよくなんねーといけねーし」

といってフレアの額を指差すレン。

「まずお前が狙われたのは足のせいだ」

「足？」

「きっとあのグレックルはきけんよちに優れてんだろ。キルのテレポートのエスパーを感じて警戒していたんじゃないか？どっちみちごろつきは救助隊が嫌いだからさ。やつらは救助隊がくると思った。そして俺らがテレポートで目的地についたとき」

レンがフレアをいったん抱きかかえてすぐ地面におろす。

「このときお前は地面についたときトンって音がしたんだろ。テレポートは地面の少し上の空中で降りる。俺らは戦闘でなれているからテレポートしたときつま先から降りて音がしないように気をつける」

今度はレンが軽くジャンプして地面に落ちる。が、落ちたときの音がまったくしなかった。

フレアは最初意識しないでジャンプしてみた。するとやはりトン、と音がする。

「あのカイリキーは耳がいい。音のするほうを狙ったんだ。だから一撃目はお前が狙われた」

やはり自分の弱点は足だなとおもった。

「だけど俺は逆にそれを利用した。おれがカイリキーとむきあったときなにをした？」

「上にはどうだんを打った」

「ああ。まあはどうだんは俺が自由にあやつれるんだが、そのときカイリキーは上に注意をむけるだろ。そのとき本物の俺は後ろに気

配と音をかくしてカイリキーの後ろにいき、かげぶんしんで分身をカイリキーの足元に出現させた」

実際にレンがはどうだんをうつ。するとはどうだんはひょいひょい向きを変えて飛ぶ。

「気配と音をけすっていうのはどうやるの？」

フレアが聞く。

「音は足の運び方だ。気配は俺の覇を周りの空気にでている微量のエネルギーとおなじ雰囲気にする」

じっさいレンがゆっくりあるくとまったくがさがさ、と足から音がしない。

そして今度は気配が消え、どこにいったかわからなくなってしまった。

「ここだよここ」

後ろを向くとバカにしたような目のレンがいた。

「そのあとは？」

「俺のかげぶんしんは技が出せないがしゃべることはできる。で、カイリキーは耳がいい。だから分身にスカイアッパーとしゃべってアッパーのふりをして構えてもらい、反射的にカイリキーの注意をまえにむける。そのあとはおれがうしろからはっけいを背中にでもきめればいい」

しかしカイリキーは背中があたっただけなのに痛みでのびている。
レンの覇はかなり強かった。

「そういえばグレックルはどうしてどくづきやへどろばくだんを？」

レンははがね、かくとうだ。毒けいには強いはず。

「どくづきだからといってよけないといきなりほのおのぱんちに変えてきて殴られるかもしれないだろ？それにへどろばくだんはお前らを狙ったんだ」

「ぼくが怪我をしているから？」

「それもあるがキルを狙っていたんだろ。キルはお前をかばうためにその場を動けなかった。だからひかりのかべをつかうしかない。そうすればグレックルはかわらわりで攻撃ができる」

「そのあとはレンがじしんでてきを浮かせでんこうせっかでちかづき真下からスカイアッパーをうとうとした」

「そ、でもまもるをつかわれたからフェイントしといた」

このときフレアは感動していた。

戦いのレベルが違いすぎる。

フレアは攻めることしか考えていなかった。

しかしレンは頭で技を順序良く放っていく。

キルだってフレアをかばいながらグレックルと戦っていた。

ちょっと救助隊の強さをなめていた。

「おら、いくぞ。その兜しまってさ」

レンがさっそくかごをもち、森の奥まで歩いていった。

都合よく設定を話すの巻

「…あれさ」

日が西に傾いてきたとき、唐突にフレアがつぶやいた。

モモンの実はもう８０個までいったところだった。

森の奥にたくさんモモンの実がなっている木があって夢中になってとり続けたら８０個までいったのだ。

「なんだよ」

レンがモモンの実をとりながらきいた。

「キルって男の子？女の子？」

「オカマ」

イラっときたので木刀を取り出す。

「心眼流〝炎剣〟」

木刀に炎がまとう。それをレンにつきつける。

「女だよ」

しかたなく答えたレン。

「クチートは？」

「そいつも女だよ」

ゼル兄ぃは男の人だと思うし、ルーズっていう人もたぶん男だ。

「なんでそんなこと聞いた？」

「いや、だって仲間だし、それくらいいいでしょ」

フレアが答える。

一つのかごいっぱいにモモンの実がたまってきた。

「性格とかは？」

さらにフレアが質問する。

レンは指を折りながら説明する。

「俺はおおざっぱでマイペースだろ。キルもおおざっぱだけどなんか元気あるな」

「クチートとかは？」

「クチートはまずしゃべらねえし、ゼル兄ぃは自意識過剰？まあ変なんだよ。兄貴は皆に対して厳しいな。あ、兄貴ってルーズな。隊長な。実は兄弟なんだぜ。お前はけっこうまじめだろ」

「う、うん」

たしかに周りからよく真面目なやつだと言われる。

ついにかごはモモンの実でいっぱいになった。

「このくらいでいいだろう」

そういって懐からペリッパーのおもちゃのようなものをとりだす。

「なにそれ？」

見たことも無いので聞いてみた。

ペリッパーに似ているが少し大きさが小さい。

「ああ、これはだな、たとえば遭難したり倒れかけの救助隊がいるだとするだろ？そういうやつはこれをつかって助けをよぶんだよ。まあ見てな」

と、いって紙をとりだしなにやら書き始めるレン。書き終えるとそれをペリッパーの口の中にいれる。

「場所はホッパーズまで」

ペリッパーの耳元でささやく。すると、ばさばさと翼が動き空へとんでいった。

「ああやって救助隊の場所をささやくとそこまでとんでってくれるんだ。で、助けてくださいとかの依頼内容の紙をもたせれば、救助隊にその紙が届いて助けにきてくれる」

「よくわかんない」

「まあ携帯のメールが送ることしかできないやつだと思えばいいんだよ。今キルにテレポートできてくれるようたのんだ紙をもたせたから。たぶんあのペリッパーだと２０分はかかるからなぁ」

レンがかごを背中にしょって言う。

「逃げるぞ」

次の瞬間7つのかげが右方向の木の茂みから飛んで現れた。

姿はよく見えない。

「うわ！」

フレアが声をあげる

「走れ」

レンが言うなりでんこうせっかでいどうする。

フレアも同様にでんこうせっかでにげだす。

かごは2つあったが結局1つしかつかわなかったのでしかたなくおいておくことにした。

ｖｓパラセクト

やがて洞窟のようなものをレンとみつけた。そのなかにモモンの実のかごをしまっておく。

「やつらはきてるか？」

レンが聞く。

「いや、まだ見えないです」

フレアが兜をかぶり、あたりを見回す。

「戦闘できるように装備しておけ。いつくるかわからないからな」

そういわれ、木刀と小刀の入ったバックを肩から提げる。

「あと、お前の癖、気をつけろよ」

フレアの癖はあしのこと全般。たとえば足元をみないでなにかにひっかかって転んだり、足音が大きくて敵に居場所がばれたり、あと

走るときすべったり、などなど。

「レン、移動しようよ。こっちから敵に向かいあわないと」

「なんで」

怪訝な顔でこちらを見る。

「いや、敵は複数だったから、錯乱するためにも」

命令されたのがしゃくだったかもしれないが、しかなく首を縦に振る。

「わかった」

ゆっくりあるきはじめるレン。

それを後ろから追う。

「ところでレンはなんで敵がいることがわかったの？」

レンはそこにあったクラボのなっている木をさした。

「木の揺れ方が不自然だった。まあ勘ってのもあったけど」

フレアがもう一つ疑問に思ったことを聞く。

「なんでぼくたちは狙われたの」

そういった瞬間フレアはレンにぶん殴られた。

「てめーのせいだよ。おそらく狙ってきたやつはごろつきだよ。さっきからなんか多いけど。てめーのそのしっぽにある救助隊の証のスカーフ。おれの肩にあったやつはもうしまったけど、ごろつきのあいだではスカーフはけっこういい品だから高く取引されるんだよ」

たしかに、このスカーフは耐火、耐熱、保温、丈夫、などなどとすぐれた能力がおおく、防御につかわれることもある。

「救助隊自体だって、ごろつきは救助隊が嫌いだし、なにより救助隊は戦闘力が高いから複数でつかまえて傭兵として売られることもあるんだよ」

「わかった。ごめん」

が、言い終わらないうちにレンに今度は投げ飛ばされた。

さらにレンはその場をでんこうせっかではなれる。

瞬間、紫の粉がさっきの場所にふりまかれた。

（あれは毒の粉？）

ぞっとした。くらえば毒に蝕まれたとこだった。

「おーい、いたぞー救助隊だー。スカーフをもっているー」

とある木のうえからパラセクトが叫ぶ。

どうやらそのパラセクトが紫の粉の毒の粉をまいたようだ。

それに気づいたレンはとっさにかわしたのだ。

「あのパラセクトか」

フレアがふっとばされた場所はパラセクトのいる木の下だった。

「心眼流”炎弾”」

小刀を構えこしょこしょと技名を唱える。すると、小刀のまわりに火が灯る。

それをパラセクトめがけて下からおもいきり投げる。

小刀はパラセクトの脇に命中した。

「ぎゃあ」

短い悲鳴をあげ、パラセクトは木の上から落ちてきた。

フレアは木の裏に隠れながら様子を見る。

パラセクトの腹の部分にかすり傷と火傷のあとが残っていた。パラセクトはその痛みに必死に絶えていた。

しかし、それを見てもフレアはどうにも思わなかった。敵の苦しむざまをみて同情するほどバカじゃない。

お父さんの心眼流の稽古でも、敵に情けはかけるなと習っていたこともある。

なにより先にむこうから攻撃したのだから、あのパラセクトを敵と認識し、その敵にいらだっていた。

だが、やはり胸の奥でくすぶるものはあった。たとえ敵とはいえど、不意をつくのは好きじゃなかった。

近くに落ちた小刀をそっと拾った。

その小刀を手に構え、パラセクトに近づく。

「く、来るな！」

パラセクトがわめいてきた。

だけどかまわずパラセクトの眼に小刀をつきつける。

「君の仲間はどこだ」

パラセクトに聞く。無駄かもしれないがやってみるかちはある。

が、パラセクトは黙ったままだ。

こいつは傷を負っているからどうでもいい。

はやくレンに合流したほうがいいな、と思った。

レンをさがすためにパラセクトの横を通り抜けようとしたとき、フレアは後ろからの水流に吹き飛ばされた。

⎡!⎤
⎣!⎦

ｖｓバンギラス（前書き）

すいません、更新おくれました。

英検があったもので。

それでは本文をどうぞ。

ｖｓバンギラス

でんこうせっかでパラセクトの攻撃をよけたあと、レンはそのままだれかにぶつかった。

「いって」

ぶつかったのは顔に傷のあるカメックスだった。

カメックスは、甲羅からおおきな大砲をとりだしている。

「お、てめーか」

まってましたとばかりに、カメックスがよっこいしょと大砲をレンにむける。

「遅い」

すでにレンはでんこうせっかでカメックスの後ろにまわりこんだ。

「それで詰んだつもりか?俺に攻撃してみろ。しかし俺の甲羅はか

たいから…」

そこまでカメックスがいったあと、みごとにレンに吹き飛ばされた。

そのまま甲羅を背にして倒れた。

「ふきとばし」

レンがはなったのはふきとばしだった。

カメックスが手足をバタバタしてもがいている。

「しってるか？亀はひっくり返ったら自力でもとにもどれないんだぜ」

レンはカメックスをまたさらにふきとばしで適当にふきとばした。

「はっはっはー、ざまーみろー」

いいながらレンは左手にはどうだんのチャージをする。

目をとじて、耳でなにか探し始める。

「そこだ」

レンのはどうだんがはなたれた。

はどうだんはやがて茂みの中に入っていった。

「うぎゃ」

悲鳴があがり、ばたりと音がした。

茂みの中からラグラージが出てきた。

「てめーなんでわかった？」

「俺は耳がいいんだ。俺の周りにあと3人はいるな。出て来い」

やがてさまざまな方向の茂みから、がさがさと3人のポケモンがやってきた。バンギラス、ジバコイル、スピアー。

全員目つきが悪く、いらだった顔でこちらを見る。

が、４人はそれぞれうなずきあい、ささささとフォーメーションをとるように動き始めた

「おし、来い」

レンが拳を構えた。

（覇）

心の中で唱えた。

やがて、レンのまわりにエネルギーが集まってくる。

「おおりゃあああ！」

声をだしたのはバンギラス。レンに拳を構えやってきた。

が、レンはそれをうけとめようとせず、バンギラスの上をジャンプでとおり、後ろで構えていたスピアーに接近する。

「！！」

「はっけい」

びっくりするスピアー。だが、レンのはっけいを頭にうけふっとび、木にぶつかり失神した。

「バンギラスはいわ、あくだからかくとうの俺によわいだろ？そんなやつがつっこんでくるのはなにか訳があるのかなあっておもってさ」

「それも布石だ」

さらに横で力をためていたジバコイルが大量の１０万ボルトをはなってきた。

「みきり×でんこうせっか」

レンがみきりでかわしながらでんこうせっかでジバコイルに近づく。

あと3歩で届くところまできたとき、ぴたりととまった。そこで、拳を地面にたたきつける。

「じしん」

レンを中心に衝撃波がおきた。

それがジバコイルにあたり、ふっとんでいく。

さらに、レンのすぐ真下であなをほるでかまえていたラグラージも地面からはいだされた。

「なんでわかった!?」

はいだされたラグラージがくるしそうに言う。

そんなこともきにせず、レンはスカイアッパーでラグラージを殴り、痛みでラグラージは気絶した。

「きあいぱんち」

不意にうしろからバンギラスの声がきこえたかとおもうと、きあいぱんちで腹を殴られ3メートルくらいつきとばされた。

「ぐへっ」

レンが覇でなんとかたえたが、唾液まじりの血が口に広がる。

「てめえ、なんで、じしんは?」

痛みに絶え絶えにバンギラスに聞いたが、その理由はやつをみたらすぐわかった。

あいつはスピアーを盾にしたのだ。最初倒したスピアーを。

「なるほど、頭は、いいんだな」

ぷっ、と血を吐き出すレン。そして左手にチャージを始める。

「さあ、バンギラス。これをよけてみろよ」

左手のチャージはまだつづく。この技のチャージは長い。

（利き手も使うか）

左手のチャージをこんどは右手に移し変える。その瞬間、一気にチャージが完了した。

それは、まるで三日月のようなかたちのはどうだんだ。

「げんしのちから」

ばんぎらすが多量のいわをレンにむかって送り出す。

「裂空」

右手を構え、三日月型の”裂空”を放つ。

裂空はいわをすべてきりさき、バンギラスに直撃した。

「わあああ」

水流にのまれながら苦しそうにフレアがもがいた。

が、自慢の木刀を構え、言い放った。

「心眼流”雷柱”！！」

水流に電気が流れ、水流の発動者にあたる。

やがて水流がやみ、フレアは体中傷だらけだったが、木刀を構えて水流のした方向を見る。

が、そこにはだれもいなかった。

「おせーぞ」

こんどはアクアジェットで後ろから攻撃され、ふきとんだ。

姿は見えた。エンペルトだった。

真上にふきとんだまま、フレアは頭が真っ白だった。

さっきの水流の威力、電気タイプへのつよさ、アクアジェットのはやさ。

さっきよりも、強い相手、そして次元も違うと思う。

「ハイドロカノン」

真下でエンペルトがハイドロカノンを放つ。

ドドドドとうなりを上げ、とても勢いが強い。

「あああああああ」

どうすることもできないフレアには目前にハイドロカノンがせまってきた。

が、ハイドロカノンは一瞬で氷づけになった。

フレアは氷づけのハイドロカノンが頭にあたり、気絶し、地面におちていく。

「なんだ?」

エンペルトが不思議そうに言う。

「アイアンテール」

急に、鋼となったしっぽがエンペルトをおそう。

しかしエンペルトもみをひるがえし両手でうけとめる。

「アクアジェット」

そのままエンペルトは距離をとろうとその場を離れようとする。

「うんまあ、今度はおれっちのほうがはえーな」

それ以上のはやさのでんこうせっかでまをつめてきたなぞのアイアンテールやろうは、レンと同じように拳を地面に突きつけた。

「ほら、じしんだよ」

エンペルトには、それしかきこえなかった。じしんの衝撃波でエンペルトは気を失った。

やがて、おちてきたフレアをアイアンテールやろうがキャッチする。

「お～セーフ」

そいつは首に救助隊のスカーフを巻きつけたフローゼルだった。

「キルちゃーん。いたよー」

フローゼルは大声で叫ぶ。

みなさんの察しのとおり、こいつはホッパーズで2番目に強いフローゼルのゼル兄ぃだ。

「あ、いた？早いなずいぶんと」

うしろからキルがあらわれる。

「ほら、こいつだろ。フレアっつーのはよお」

ゼル兄ぃはフレアをキルに渡す。

「なんだ、気絶してんのか」

キルはフレアを背中にしょう。

「よーし、じゃあレンはおいてくかー」

ゼル兄ぃがにやりと笑う。

「そうしようそうしよう」

キルもにやりと笑う。

2人ともレンにいろいろとうらみがあった。

「ちなみにここはどこだ?」

「えーと、基地から30キロ程度はなれてんなー」

キルが地図を思い出しながら言う。

「よし、まあ修行にはもってこいだな」

ゼル兄ぃががっはっはと笑う。

やがてテレポートでゼル兄ぃとキルとフレアは救助隊本部に帰っていった。

「おせーな、キル」

モモンの実のかごをせおってこないはずのキルを待ち続けるレンであった。

ちなみに真横には失神しているバンギラスがいる。

やがて、満月がレンの視界に入る。

「…おせーな、キル」

モモンの実を届け（前書き）

すいません、期末テストが近づいてきたので更新が当分遅れます。
7月までは更新ができないかもしれないのでよろしくお願いします。
では、本文をどうぞ。

モモンの実を届け

「おい、起きろよ」

「ふえ？」

だれかに声をかけられ目を覚ますフレア。

急いで体を起こす。

「…兄ちゃん？」

目の前にはフレアの兄のタツベイがいた。

フレアが寝ていた場所は、自分の部屋のベットだった。

「お前、学校」

タツベイがいう。

ちらりと窓を見ると、太陽が昇っている。

記憶をおもいかえすと、たしか時刻は夕方ぐらいでホッパーズの依頼のモモンの実の件で、しかも相手がめっちゃ強いエンペルトでハイドロカノン打たれそうになってぎゃあああってなったけど、ハイドロカノンが急に凍ってその塊に頭を打って気絶したはずだ。

で、今はどうやら朝。しかも、昨日は日曜日。今日は月曜日。

「兄ちゃん、今何時？」

「7時57分」

遅刻まであと3分

「あと3分じゃん」

頭が真っ白になるフレア。

フレアの学校は遅刻に厳しい。遅刻したら校舎の3階からつき落とされてしまう。

しかし、このまま休むと授業が分からなくなる。

そのとき、バタンとドアの閉まる音がした。

フレアの家のドアは基本開きっぱなしだ。

ちなみに家は一応一軒家だ。しかし、周りは別の人の田畑に囲まれている。

さらにいうならばフレアの学校はこんな田舎から5キロ離れた街のほうだ。

そのまちの名前はタマムシシティ。フレアの住む町はポックシティ。

ポックシティとロストシティは近い。

ドアから入ってきたのはキルだった。

「おはよーっフレア！」

「キル、どうしたの？」

急な訪問者にびっくりした。

「ごめん、昨日おこったことはフレアが帰ってきてから話すからさ、まず学校行こう。つれてくから」

すでにキルの周りには紫のエネルギーが集まっている。

「兄ちゃん、いってくるから仕事がんばってね！」

ランドセルをひっぱりだしてフレアはいう。

「おう」

すでに兄はフレアがなにが起こったのかわかっていたのか、冷静に返した。

「学校に着いたよ」

次の瞬間、フレアの足は地面の感触を感じる。

ここは、校庭のすみっこのほうだった。もうすでに門より中にはいっているから遅刻は大丈夫だった。

「キル、昨日、僕はどうなったの？」

どうしても聞きたかったから時間はなかったけど聞いてみた

「う～ん、話すと長くなるけど、簡単に言うとエンペルトからフレアを助けたのはゼル兄ぃだよ。で、そのままうちがフレアの家までテレポートで送っていったの。気絶してたからさ」

「ああ、ありがとう」

くわしいことは後で聞くことにした。

（朝ごはん食ってねーから腹減った）

ダッシュで校舎の中へ入っていった。

学校が終わり、放課となった。

結局、おなかがすいて午前中は授業に集中できなかった。

門を出ると、右端にキルがいた。

「や。テレポートしなくてもあるいて帰れそうだから歩きながら帰るぞ」

「じゃあさあ、キルに聞きたいことがあったんだけど」

「なに？」

「キルの銃ってどっからでてくんの？あと、銃の弾とか…」

この前、いきなりでかいバズーカがでてきたから疑問におもった。

「テレポート」

キルが唱えると、ピストルのような銃が2丁、キルの上に出現し手に収まった。

さらに今度はそのピストルを上に投げてまたテレポートをかけるとこんどはマシンガンのようなゴツイ銃がでてきた。

「うちはさ、力がないから銃を使うんだ。銃の出し入れはテレポートを使ってさ」

ホッパーズの武器庫にキルの使う銃が大量においてある。といっても、ダンボールだけど。

「手の甲をみてよ」

フレアがキルの右手の甲を見る。

すると、線が一本はいっている。

「銃一つ一つにもこの線が入っている。この線は、うちのエネルギーを埋め込んだもの。この線同士は引き合う力をもっていて、任意の銃をテレポートを通してしてうちの手のこの線と引き合わして出現させるってわけ」

「よくわかんない」

クエスチョンマークがでっぱなしのフレア。

「まあ、このことは詳しく知らなくていいよ。ようするにうちは銃の出し入れをテレポートでしてるってわけ」

まあ、ようするにキルのテレポートはすごいってことだとは分かった。

「もちろん任意の場所に突き放すこともできる。それを同時にやることで銃が入れ替わったようにみえるだけだよ」

「あと、いまさらなんだけど」

恥ずかしそうにフレアが聞く。

「エネルギーってなんなの？」

唖然とするキル。

「わかんなかったの？」

「うん」

「えーと、まあ話せば長くなるけど」

エネルギーとは血液のように体全身にながれているものだ。

肝臓のそばにある特殊な臓器がつくるといわれている。

ビタミンなどが原料らしい。

そして、ポケモンはこのエネルギーを使って戦闘をする。

ポケモンたちにはエネルギーを出す穴がある。

エネルギー点といって、そこの出し入れでわざをつかう。

エネルギー点は、基本はポケモンそれぞれちがう。手のどこらへんにあるのかとか、足にあったりとか。

修行で無理やり空ける人もいる。

「エネルギーは無、火、水、電、草、氷、闘、毒、地、飛、念、虫、岩、闇、竜、悪、鋼の17種類ある」

基本からだに流れているエネルギーは無のノーマルで、これまた体のどこかの臓器がいろいろなタイプに変換させているらしいのだ。

「フレアは火のほかに電や氷のエネルギーはだせるけど、水なんかはだせないでしょ？」

たしかに火は普通につかえるし、電や氷は木刀を使えば出せる。しかし、水はつかえない。

「で、また技の出し方で技系がかわるんだけど」

フレアの心眼流”炎剣”やレンの覇のように、エネルギーをまとわせ攻撃するのを纏技という。

キルの銃やレンの裂空など、エネルギーを飛ばして攻撃するのを放射技という。

なきごえやのろいなど、能力のへんかなどを変質技という。

また、どれにも属さないのを特種技という。

「フレアの火の粉は放射技で、エネルギー点が口の中のどこかにあるんだよ」

キルはテレポートで銃をとりだす。

「うちのエネルギーは銃をとおしてこうげきする。手でうつより精度がいいし、威力も上がるからね」

フレアは、いつももちあるいている木刀に炎をまとわせる。

「これが纏技か…」

そんなこんなで家についてしまった。

「ちょっとまっててね」

急いで家に入り、いつもの兜と小刀をバックにいれ、肩からかける。

タツベイは働きにいったのか家にいない。

タツベイは中学生なので簡単なバイトしかできない。

だから、すぐかえってくるだろうとおもい書置きをしておいた。

たぶん、昨日も遅くまでかえってこなかったから混乱していただろう。

いや、でも兄ちゃんが朝冷静だったから、昨日気絶した自分を家まで運んでいってくれたキルから事情を聞いていたのかもしれない。

「ごめん、遅くなった。はやくホッパーズにいこう」

フレアが家から飛び出す。

「わかった」

キルがすばやくテレポートをかけた。

ホッパーズのドアの前にテレポートしてきた。

「ゼル兄ぃはいるの？」

フレアが聞く。

「うん、いるけど…どうして？」

キルも聞き返す。

「いや、昨日のお礼でもいわないとね」

そのままドアを開ける。

中にはいるとクチートのパソコンのいじる音が聞こえてきた。

リビングに行くと、ゼル兄ぃが「おす」と声をかけてきてくれた。

レンはまだいびきをかいてソファで寝ていた。

「実は昨日いたずらでレンはあの森においていったの」

キルがフレアに耳打ちする。

「だから昨日の夜寝ないでホッパーズを探し回ってけっきょく今日の朝らへんに帰ってきたから今眠っているの」

フレアにきたことにきづきレンがむくりと起きる。

「副隊長～お昼ねはだめだろお～」

ゼル兄ぃが言う。

「じゃあ昨日おれはなんで置いてけぼりにされたんだよ。あのごろつきは警察署にぶちこんできたしよ、へんな刀使いには会うしよ、大変だったよ」

レンが切れ気味に反発する。

ちなみにこの世界にも警察がいる。町の治安を守ったり、罪を犯したものの逮捕などをしている。

「で、フレア。モモンの実は解決したから金もらったからさ」

隊長のプレートのはってある机から封筒を取り出す。

「５万もらったからここの生活費とか電気代とかその他もろもろ引いて５０００ポケ、給料としてわたすよ」

封筒を投げ渡すレン。

あわててとるフレア。

封筒の中をみると１０００ポケ札が5枚入っていた。

お金の扱いは慣れていたのでびっくりはしなかったが、昨日がんばった分のお金がもらえたのはとてもうれしかった。

「ていうかフレアもここすめばいいじゃん」

ゼル兄ぃが言う。

「分かりました、考えときます」

一応兄の承諾をとるまでは自分で決められないので、とりあえずこう返した。

ピピピとキルの携帯のメール着信音がなる。

「クチートが依頼だってさ」

キルが言う。

「まじか」

レンがうれしそうに言う。

「内容は…」

キルが言う。

「僕をたすけてください。パッチール」

「……よし、次いってみよう！」

うん、おかしいなとレンは思っていた。

モモンの実の件から1週間は経っていた。

その間に変わったことといえば結局フレアもこのアパート「ホッパーズ」の本部に住むことになったことぐらいか。

どうやらフレアの兄に「おめえあっちに住んだほうがいいぞ」といわれたそうだ。

それとあれから依頼がさっぱり来なくなったことだ。

レンがねっころがっていたソファからみを乗り出す。

「俺さ、いつも暇なときってなにしてたっけ?」

レンが座っている向かい側のソファに座っているキルに聞く。

「…いわれてみればなにしてたんだっけ?」

キルはそういって銃の手入れをしている。

ちらりと時計を見ると3時を少し過ぎるころだった。

「もうおやつの時間じゃねーかよ」

あのパソコンのクチートは夜ご飯の買い物に出かけている。が、すでに1時間は帰ってきてない。

ゼル兄ぃは毎度のことながら遊びにいっている。

たぶん今日は競馬だ。めずらしく朝コンビニでスポーツ新聞をかって「今日はギャロップの『シルクイーグル』かあ。いや、ケンタロスの…」

とかつぶやいていたらダッシュで外へ走っていったのが見えた。

レンは1日中ごろごろしていた。

テレビもない、ゲームもない、彼女いない、やりたいこともない、

この世の生きる希望もない。

そして依頼もこないし、フレアもいないのでフレアの特訓ができない。

特訓といっても、一方的にレンのリンチだけど。

「なあ」

キルが話しかけてきた。

みると、銃はすでにダンボールにしまいこみ、ＵＮＯを手にもっている。

「うちも暇になったからうまい棒かけてＵＮＯしない？」

ホッパーズ内では通貨は１うまい棒だ。１うまい棒＝９ポケ＝９円

「てめえ賭博はポリ公のお世話になるだろう。最近すもうとりが捕まったじゃねーか」

「これは金じゃないうまい棒だ」

キルが反論する。

「そんなことよりよ、早くフレア迎えに行けよ。フレアをリンチ…特訓させるんだからさ」

「まだはえーよ。あいつ学校終わるの４時だよ」

といってうまい棒を１０本用意してきた。

レンもしぶしぶ隊長専用の机の引き出しからうまい棒を5本取り出す。

「1回の勝負にお互い1本ずつかけて、勝ったらその出ているうまい棒を取れるやつね」

そのときブルルとキルのケータイがなった。

「クチートからのメールだ」

「依頼か？」

レンの目が輝く。

「ＵＮＯなら私もやりたいだって」

キルが答える。

すると、玄関からすっとクチートが現れた。

「おめーかえってきたのかよ。つーかそのくらいしゃべれよ」

ちなみに隊長のルーズでもしゃべった瞬間をみたことがないらしい。

ゼル兄ぃはあるらしいが「あ」と言ったところだけだった。

そんなクチートは1本のうまい棒を構え、ケータイを取り出しキルのケータイにメールを打つ。

ホッパーズのケータイ所持者はキル、クチート、ルーズだけだ。

すぐにキルのケータイにメールが届く。

「貴様らはこのうまい棒１本で十分じゃあ！！だって」

「てめえ結構強気じゃねーか！上等だ！勝負してやらあ！！」

「あ、もううまい棒ない」

レンがさけぶ。

「うちもなくなったから買いにいくぞ」

必死にキルがいう。

そしてクチートの横には１００本ほどのうまい棒が置かれてある。

「ちくしょー！あいつ残りの2枚の『UNO』と1枚の『UNO』いってねーじゃねーか！」

「いってるよ、ツイッターで」

キルがため息をつく。

「ほら、スーパーまでテレポートするから」

手を差し出す。

「おおよ」

それをつかむ。

瞬間2人はテレポートした。

クチートはそのときちらりと時計をみた。

5時30分をすぎていた。

「…」

「おいてめーここスーパーじゃなくてスーパーマンの秘密基地じゃねえか。昔依頼で行った」

「うっせー今日は調子わりーんだ。もっかいやっからさ」

「ううん、おそいなあ」

空はもう暗くなり始めていた。

フレアはそれでも4時に向かえに来るといったキルを校門で待っていた。

寒さで震え、くしゃみが出た。

しかし、時間がもったいないので木刀で素振りをしていた。

すると、目の前に人影が現れた。

「キル？いや、ちがう」

やがて現れたのがクチートだった。

「クチート？なんで？」

すると画用紙に書いてある文字を見せてきた。

『キルは用事があって迎えにこれない。遅くなってすまん。帰るぞ』

「あ、そうなんだ」

フレアがうなずく。

クチートはそれを見るとくるりと後ろを見て歩き出した。

それをみてフレアもクチートの横を歩く。

やがて学校の敷地を完全に出たころ、クチートはフレアに向かってうまい棒サラミ味を投げた。

『食え』

と、画用紙を見せてきた。

「あ、うん」

バリバリとうまい棒を食べる。

それにしても、めずらしいと思った。一日中パソコンいじってたりしているクチートが迎えにきてくれるなんて。

外にでることだってあまり無いのに

やがてうまい棒を食い終えたフレアはごみをきちんとランドセルの中に入れた。

「クチート」

フレアがつぶやく。

「ありがと」

「ああ」

「てめーここスーパーマーケットじゃねーか！ついに来たな！」

「うっせー！とっととうまい棒買い占めるぞ！！」

アルセウス（前書き）

急いで書いたのでものすごく雑な文になってしまいました。すいません。

では、本文をどうぞ。

アルセウス

とある工場。

「社長！！」

一人のウパーが走って『社長』のもとへ来た。

「特許申請をしました」

「おお、そうか」

社長と呼ばれたカイリキーはうなずいた。

ここ社長室にはいま5人のポケモンがいる。

カイリキー、マグマラシ、アリゲイツ、レントラー、ウパー

社長が大きな机にいて、マグマラシ、アリゲイツ、レントラーはその隣の机でパソコンをいじっている。

そしてカイリキーのパソコンに『重力制御装置』とかかれてあった。

「でも、いいんですか?重力制御装置を公にして」

ウパーが尋ねる。

「ああ、いいよ。たしかにこれは兵器にもつながるからな。逆に公にしないとこっちが怪しまれるからな」

「あの、ところで」

ウパーがもじもじする。

「重力制御装置はどういったもので」

ガクッ、とくずれるカイリキー。

噴出すマグマラシ。

うなずくアリゲイツ。

耳が聞こえないレントラー。

「いや、あのな」

といってカイリキーは引き出しから手のひらサイズの丸い金属とリモコンを取り出す。

そしてマグマラシに指示をした。

マグマラシは急いで大きなダンボール箱を取り出す。

その箱をカイリキーの目の前に置く。

カイリキーは丸い金属を段ボール箱にガムテープで固定する。

そのまま手にもっていたリモコンのボタンを押す。

すると、ダンボール箱が空中に浮いた。

それをみて目を丸くするウパーとアリゲイツ。

「こんな感じに物体の重力を自由に操られる装置だよ」

ふわふわ浮いているダンボール箱の側面をかるく押してみる。

するとダンボールはすーっと横にいどうして壁に激突した。

「ただ問題点は残っててさ、あんまり重いと効果がでないんだ」

「そ、そうなんですか」

いまだ驚くウパー。

そしてアリゲイツ。

「ま、じゃあウパー、悪いけど席をはずしてくれないか」

わかりましたと言い、ウパーは社長室から出て行った。

ふうとため息をつき、カイリキーはマグマラシにいった。

「『おまけ』のほうはどうだかレントラーに尋ねてくれ」

「はい」

マグマラシは画用紙に大きなペンで『おまけはどうだ』と書いた。

それをレントラーに見せる。

「できてますよ」

レントラーがいったが、アクセントがおかしい。

耳がきこえていないためだ。

「そうか、じゃあみしてくれ」

研究室に４人は入っていった。

研究室といっても中はさっぱりしていた。

パソコンが２台しかない。

そして真ん中に野球ボールのような金属の塊があった。

それは、いま台の上におかれている。

「あれです」

またもや変な口調でレントラーがいう。

アリゲイツがくすくす笑う。

「アリゲイツ、笑ってんじゃあない。しょうがないんだろ、耳が聞こえないんだから」

カイリキーがいいながら、渡されていたリモコンのボタンを押して

みる。

すると、金属のボールがぷかぷかと浮き始める。

そして、最初におしたボタンのすぐ下にある、赤く大きなボタンを押してみる。

やがて、金属のかたまりから黒いオーラがじわじわ出てき始める。

「おお」

カイリキーがうなる。

黒いオーラはやがて直径3メートルの球体のような形になった。

「すばらしい」

カイリキーはレントラーに手話で伝える。

（なあ、おい）

アリゲイツが隣のマグマラシにささやく。

（お前さ、まじでこんなやばそうなもん作ってる会社のっとるきなの？）

（あたりまえさ。そしたらお前は副社長にしてやるぜ）

（おうおう、♀ポケモンてのは恐い恐い）

「社長、これはいったいなんですか？」

アリゲイツが聞く。

「ん～亜空間？」

カイリキーがつぶやく。そしてふところから鉄の塊を取り出し、黒いオーラ『亜空間』にむかって軽く投げる。

鉄の塊は亜空間にはいるまえは存在していたが、やがてすぐに圧縮

されてしまったようにみえた。

「！！　今のは？」

「シッ」

そのまま肉眼でぎりぎりまでみえるようになった鉄の塊は、亜空間を生み出した金属の塊にすいこまれてしまった。

マグマラシは考える。

「ようするにあの亜空間は物質を圧縮させる力をもっているんですね」

「そうだ」

「そして、ちいさくなった物質をあの金属の球が吸い取る」

「うん、正解」

カイリキーが答える。

「よくわかったな。全くそのとおりだ」

「でも、社長、いったいこれはなにに使うんですか？」

アリゲイツが聞く。

「これは、もう兵器だからどっかのテロリストに売って金儲けだな。まあ、これはけっこうな電力消費すっから改良しないとな」

「ああ、なるほど。あ、あとそれと」

アリゲイツがナイフを取り出す。

そして真剣な目で言う。

「ねずみがいます」

さっ、と投げたナイフはそのまま壁につきささる。ズギャ、としたあと、なかから盗聴器のようなものがせりだしてきた。

「ねずみをさがせ。すぐそこにいるだろう」

カイリキーがすばやく命じる。

「大丈夫です。そこだ！」

アリゲイツがこんどは1本ナイフを投げる。すると、たくさんの氷でできたナイフの分身が現れた。

そのまま天井に円状につきささった。すると、円状に天井がくずれ、なかからライチュウが落ちてきた。

「チッ」

落ちながらライチュウがおおきな銃をとりだし、空中で弾を撃つ。

それに対し、アリゲイツはナイフを１０本連続で投げる。

最初の2本で弾をはじき、さらに6本で銃を刺し、2本でライチュウの2本あしにダメージを喰らわせる。

「しまっ」

そのままライチュウは体制を崩し、ちょうど亜空間の中へはいってしまった

「ぐわあああああ」

そのまま金属の球にすいこまれていってしまった。

「社長。この盗聴器にもしかしたら今のことが…」

マグマラシがいう。

「う～ん。そしたらだれかしらにばれちゃったね～。引越しでもするか」

「つーかいまのライチュウはどこのやつだ」

ナイフをひろいながらアリゲイツをいう。

「しらね。まあいいや、マグマラシとアリゲイツは亜空間装置を厳重に保管しといてね」

はい、とうなずく。

「そしてレントラーはとっとと改良しといてね」

手話で言う。

「はい」

レントラーは答えた。

「ライチュウとの交信が消えました」

パソコンをいじっているリオルが答える。

「あ～あ、盗聴器も気づかれちまったよ～。でもいいこと聞けたしさ。亜空間だっけ？兵器？圧縮？」

レアコイルがぶつぶつ言う。

「でも、ライチュウの生命反応は消えていない」

ガブリアスが、壁に埋め込まれたモニターをにらみ答えた。

「やっぱ怪しいとは思っていたけど、兵器つくってたのか」

リオルが立ち上がり、背伸びをする。

「これってさ～、違法だよね。兵器をつくるのはちゃんとした機関をとおしてからじゃないと」

「しかもテロリストに売る、ってことはテロの手助けしてる。これも違法じゃない？」

「潜入操作いていたライチュウと交信が消えた、ということで、」

リオルが振り返る。

「どうします？神」

「救助隊に頼もう。掲示板に依頼書を書き込んでおいてくれ」

神とよばれたアルセウスが答える。

「私が行ってもいいのだが」

「神、あなたはポケモン界を収めるただ一つの存在なんですよ。他にやることがあるでしょう」

「めんどくさい。さぼりたい」

アルセウスが口を尖らせいう。

リオルが早速パソコンと向かい、依頼書を書き込んだ。

「内容は？」

リオルが聞く。

「ある工場にある、亜空間装置の破壊。実行まえに、いちどここポケ界議事堂にきてもらおう。報酬は５０万でいいかな？あ、工場の地図もつけといてくれ」

「でも、神。けっこう難易度高くないですか？こういうのはランクのたかいプクリンやフレアーズ、斬などの救助隊にたのんだほうが…」

アルセウスが顔をしかめる。

「あそこは高い金を払わないといけないからな。１０００万くらい」

「でも、この任務は危険すぎます。亜空間装置は恐ろしい兵器です。かなり」

「う～ん、じゃあ」

アルセウスは机の引き出しから紙を取り出す。その文字を見てうなずく。

「そうそう。あのヤミラミのルーズが隊長のホッパーズなんかに頼もう。ランク低いけど、実力はあるよ」

わかりました、といいリオルはホッパーズに依頼書のメールを送った。

「あ、あと神。あとちょっとそこの裁判所でごたごたがあったのでできれば神に裁判長をしてもらいたいと」

リオルが尋ねる。

「おお、わかった」

ｖｓガブリアス

「……」

ズサッ

「おーっ！、すげえ」

レンがものめずらしそうに言う。

今、ゼル兄ぃはみんなの前でテーブルクロス引きをやってみせた。

「すごいよゼル兄ぃ！！」

フレアが喜ぶ。

「そしてテーブルクロスとかグラスってどっから盗んできたんだゼル兄ぃ」

同じくキル。

「…」

相変わらずしゃべらないクチート。

「いやなんか昨日ＢＡＲでもらったぜ」

得意げに言うゼル兄ぃ。

今日は土曜日ということで隊長以外の全員がホッパーズの本部に集まっていた。

「じゃあ次もやってよ、あの、グラスがタワーになっているやつ」

「ＯＫ、任せな」

といってグラスを積み上げるゼル兄ぃ。

そのとき、キルのケータイがぶるるとなった。

送り主はクチート。

（依頼かな）

画面を見る。

「！」

驚くキル。

「レン」

今、フレアとゼル兄ぃが盛り上がっているので小さめな声で呼んだ

「なんだ、依頼か？」

うれしそうに聞くレン。

「これ…」

渡されたケータイを隅から隅まで読むレン。

「…まじかよ！」

後ろにのけぞるレン。

そのまま地面にあったうまい棒を踏んでバランスを崩し、グラスのタワーに突っ込んでしまった。

「……ってレン、貴様ぁぁぁあああ！」

「グラスのタワーがあああ！」

大量のグラスは地面に落ちて割れてしまった。

「神からの依頼？」

フレアが興味津々に聞く。

「へぇ」

ゼル兄ぃが不満げに言う。

「だれか掃除手伝って」

レンが砕けたグラスをちりとりであつめている。

それを手伝うクチート。

「うん。そして報酬は５０万だって。いちどポケ界議事堂に来てほしいらしく、そのとき依頼内容を詳しく説明するみたい」

「なんだろ、なんかやばそうだけど」

神と聞いてうずうずしているフレア。

「それよりも気になるのはよ、隊長がいなくて大丈夫かって話だ」

ソファでごろごろしながら聞くゼル兄ぃ。

「なんで？」

返すフレア。

「神からってことはさ、ようするにうちの隊長のルーズをあてにしてるんじゃねえの？」

「ま、たしかに兄貴は強ええからな半端なく」

レンがソファに座りながら言う。

「でも、いいよね。俺行ってみたい」

フレアがさっそく木刀を構える。

「フレア、依頼内容が1日で終わるって訳じゃないぞ？学校までま

にあうかわかんないよ」

キルが心配そうに言う。

「それはだいじょーぶだってー。おれっちがそっこー終わらすからさー」

床にまでおりてごろごろするゼル兄ぃ。

「うん、まあ久々の依頼だし、みんなでやろう。キル、とっととポケ界議事堂に行くぞ」

ここぞとばかりにかたに救助隊のスカーフを巻くレン。

みんなもそれにならってそれぞれスカーフを巻く。

「おし、準備完了」

力をため続けたキルのまわりに紫のエネルギーが集まる。

「ま、待って」

すでに兜をつけているフレア。

みんなでキルに捕まる。

「テレポート！」

そのままテレポートした。

「おし、ついたな」

着地したレンは早速屈伸をする。

「気合はいってんじゃん」

そっけなくキルが言う。

「なんで兜つけてんの？」

「いや、あの、いつでも戦闘できるように」

目の前にはレンガでできたとても大きな建物があった。

「やば、正門をすっとばしてきた」

後ろを振り向くと、確かに正門らしきものがあった。

目の前には階段があり、おおきな扉がすでに開いていた。

「ここにテレポートしたってことは、キルはここにきたことがあるの？」

早速疑問をもつフレア。

「いや、うちは地図を記憶すればそこにいけるんだよ」

自慢げにキルは言った。

「ほらあ、とっとと中に入ろうぜ」

ゼル兄ぃがみんなを促す。

「おう」

レンが短く言った。

そのまま階段を上りかけた時。

「あ～っ、ちょっとまってください」

上から声がした。

「あ？なんだ」

あらわれたのはリオルとガブリアスだった。

「ルーズはいるか」

ガブリアスが聞く。

「待て、てめーらはなんなんだ」

レンが代表して聞く。

「質問するときは名乗りなさいバカヤロー」

それをむしして続けるガブリアス。

「ルーズがいないばあいは実力で試してから入れろと神から命じられているので…」

ガブリアスが大きな日本刀を取り出す。

「実力で中へ入ってください」

「もうはいってるよ」

「は？」

「へ？」

フレアとガブリアスが声を上げる。

みると、ガブリアスの後ろにゼル兄ぃがいた。

足はたしかに議事堂のなかに入っている。

「いつの間に」

「まて、分身かもしれない。なんせまだあっちにそいつの波動がする」

レンがいるところを指差し答えるリオル。

「ああ、波動ってあれのことか」

ゼル兄ぃがさらに指差す。

そこには氷でできたゼル兄ぃの姿があった。

「！！氷分身」

「ちがうよ。ただのおれっちが瞬時に作ったおれっちの彫刻だよ」

「え、でもそしたらなんで波動が？」

リオルがゼル兄ぃに聞く。

「ああ。だってこの技は纏技だから」

するとゼル兄ぃはひょいと右手を振る。すると彫刻が走り出したりジャンプしたりする。

「でもこれは放射技の応用でもできるはずだ」

ガブリアスが反論する。

「そもそも、貴方にあの彫刻は纏っていない、あるいは触れていな

いじゃないですか」

「いんや、触れてるんだなそれが」

と、ゼル兄ぃの横にレンとキルがテレポートで現れる。

「ただし空気を通して、だけどね」

「ゼル兄ぃは空気中の水分を自在に操ることができるんだ」

3匹はそういって奥に入っていく。

「ま、待ってよ」

あわてて入るフレア。

「いや、てめーは駄目だ。実力でためさせてもらう。リオル、お前は3匹の案内をしろ」

「わかりました」

リオルはそう言って奥に入っていった。

「さて、じゃあ」

ガブリアスは日本刀を抜き、一振りしてかまえた。

「こいよ」

「う、う～ん」

どうしよう、とフレアは思っていた。

こんなやつ、倒せるはずがない。

フレアのピンとレンズには、ちゃんとガブリアスのとんでもないエネルギー量がよく見えていた。

こんなやつと戦ったらひとたまりも無い。

「あ、あの」

「なんだ、怖気づいたか」

「はい」

がくっ、となるガブリアス。

「僕は一番下っ端なので、ここでまってます。みんなを」

「レン」

「なんだ」

歩きながらゼル兄ぃは聞いてきた。

「お前、なんでおれっちの技のからくり知ってんだよ。お前そしたらホッパーズのベスト2のかたがきがとられちゃうじゃないか」

「へ、しってたさ」

そういってレンはゼル兄ぃの手の甲をみた。

「ここだろ、お前のエネルギー点。それに、纏技の一番の弱点は自分の体にダメージが残るということだ」

そいってレンは自分の右手にエネルギーを纏わせる。

そのエネルギーを思いっきり噛む。

すると、手の甲に歯型がついた。

「な、あってるだろ?」

「ああ、ご名答だ」

ゼル兄ぃがあせりながらも言う。

(つーかフレアおいてきちゃったな)

「なあ」

キルが気分悪そうに聞く。

「お前らはこの圧迫感がなんともないのか？」

「あ？」

「圧迫感？」

纏技よくを使うレンやゼル兄ぃは感じなかった。

なぜならレンの覇まではいかないが微量にエネルギーが普通より多く体の表面に流れている。

しかしキルは放射技をよく使うのであまりからだを覆うエネルギーが多くない。

まあ、それはあくまでこの3人のはなしで、放射技を使うひとでもエネルギーが覆っていることがあるが。

ちなみにエネルギーの圧迫感というのはアルセウスの流れているエネルギーがつねに半端無くあるためだ。議事堂の5階にアルセウスがいるのだが、3階にもなると圧迫感を感じる。

リオル、レアコイル、ガブリアスもそれなりにいつも耐えている。

「じゃあ、こちらで休んでいましょう」

リオルがすぐ右隣部屋をキルに案内する。

「ずいぶんと少なくなったな」

ゼル兄ぃがレンを見て言う。

「ああ」

レンが返す。

「今のうち、バトルするか？」

ゼル兄ぃがいきなり聞く。

瞬間、レンは覇を使う。

「やめとく」

と、いってゼル兄ぃの氷の刃の攻撃をかわす。

「なんだよ、つまんない」

ハハハと笑う。

やがてリオルがまたやってきた。

「ここの階段を上ってください」

ついに5階へやってきた。

「ああ、確かに圧迫感を感じる」

レンが冷や汗をかく。

「たしかに、ぼくもいつもいっしょにいるだけでとても疲れます」

リオルも言う。

「そーかあ？」

手をひらひらしてゼル兄ぃが言う。

「本当に強いんですね。さっきの彫刻といい…」

リオルが困りながら言う。

5階でこんなへらへらしたやつははじめてみた。

といっても、ルカリオだって十分すごい。

少しの冷や汗ですんでいる。

やがて3人はついに『神の間』という部屋までまでたどりついた。

「ここです」

そのままリオルが扉を開ける。

ゼル兄ぃが口笛ふいて一歩中へ入っていった。

（なんでゼル兄ぃは余裕なんだ？）

レンはもう覇を使わないとぶっ倒れる勢いだった。

「どーも」

と、軽い調子でレンも中へ入った。

「どーも」

そしてなかにはアルセウスがいた。

レンたちはアルセウスの向かい側のソファに座らせてもらった。

「…、まあようするにこちらが頼みたいのは亜空間装置に破壊で、達成できたら５０万は約束しよう。あ、あとライチュウもできれば連れ戻してほしいんだけど」

「わかりました」

レンが答える。

「なんなら今日でもいいですよ」

「じゃあ、ぜひ頼む」

（なんでお前敬語なんだよ）

ゼル兄ぃがよこからこそこそ言う。

（うっせーばか、普通そうだろ、目の前神だよ?俺らの祖先であり治めるものであり半端ねー半端ねーよ）

アルセウスが地図を渡す。

「君のところには地図をみればそこへテレポートできるひとがいたね。うちのライチュウが亜空間装置のなかでかいたものだ。使ってくれ」

ゼル兄ぃが片手でうけとり読む。

「ずいぶんと工場、ってかんじがしないな」

敷地はせまく、3階で構成されている。学校のようなかんじだ。

「小さいものを作っているしな。ＩＣチップとか?」

「ちなみに、亜空間装置は何階にあるんですか？」

「わるいがそれは知らない」

レンがゼル兄ぃを見る。ゼル兄ぃはうなずく。

「じゃあ、わかりました。依頼が完了したらまたきます」

いよいよ突入

「ここか」

キルのテレポートである場所にやってきた。

ちょうど目の前にあまり大きくない工場らしきものがある。

工場のすぐそばに海がある。

工場の周りにもたくさんの道路と別の工場があったが、どれも大きかったのでレンたちの目標の工場がとても目だって見えた。

その様子を防風林のなかから見るレンと仲間達。

「今は視察だ視察」

レンがうずうずしているフレアにぴしゃりと言った。

あのあとすぐにレンとゼル兄ぃは2人を呼んでキルのテレポートで

早速目標の工場へやってきたのだ。

しかし、今はまだ働いているこのことにかかわっていない一般人もいるため視察して夜に侵入しようという計画だ。

「でも、もしかしたら一般人もこのことにふれているんじゃ？」

フレアがもごもご言う。

早速乗り込もうと思っていた矢先にレンに怒られたのでしょんぼりしている。

「だから夜なんだよ。夜になったら一般人は帰るだろ。で、その亜空間装置にかかわっているやつらが残っているかもしれない。だって危ない兵器だぜ？かかわっているのはその工場の偉い人だけかもしれねえ」

「そしたらそいつらに場所吐かしてＯＫだろ」

キルが次いで言う。

「でも、もし誰も残っていなかったら？」

「そしたら俺らで探して亜空間ぶっこわして朝まで社長を見張りだな」

レンがぶっきらぼうに言う。

「じゃ、様子はつかめたんで、あとは各々解散で。夜１０時になったら現地集合」

レンがそう告げる。

「じゃあ、うち以外に帰るやついる？」

キルが聞く。

「あ、じゃあおれっちも」

ゼル兄ぃがあくびしながら言う。

そのままキルたちはテレポートでかえっていった。

「おい、フレア」

となりに座っているフレアに聞く。

「なに？」

「なんでお前は帰らないんだ？」

「レンだってそうでしょ」

レンがむっとなって言い返す。

「おまえ飯だいじょうぶかよ？今午後3時だぜ。夜飯くわねえとぶったおれっぞ？」

フレアもむっなって言い返す。

「僕だって断食したことあるよ。修行で3日」

「残念、俺1ヶ月」

舌をだして笑うレン。

「とにかく僕は大丈夫です。この前はレンとゼル兄ぃに助けてもらっているので、名誉挽回です」

木刀を構えるフレア。

「そーかい」

地面にすわるレン。

「…時に闇の魔法使いの弟よ」

がさがさと後ろからまっすぐな声がした。

フレアはびっくりして振り返る。

レンはちらりとみたとたんすっと立ち上がった。

「剣さん」

レンが目を見開いて言う。

「たしかレンといったな」

「そこ『申したな』じゃないんですか？」

「いいんだ、言葉は適当で。雰囲気作りだ」

剣とよばれたポケモン、ジュプトルはうなずく。

「おぬしに聞きたいんだが、そこの建物からの邪気、あれはなんだ」

レンが敬語で答える。

「やはりあなたなら感じますか。あれはようするに小型のブラックホールのようなものらしいですが、よくわかりません」

剣が木の切り株に腰をおろす。

「今、私たちはそれを壊す依頼を受けてきたんですが、剣さんはどうして？」

「いや、ただ気になっただけだ。ところで、おぬしの兄は？」

「相変わらずです」

「そうか」

剣はそのまま無言でめをつむる。

レンはどうしたかとおもう。

そのまま1分が過ぎた。

すると急に立ち上がり、腰に3本ある剣のうち一本をフレアに投げ渡す。

「使え。心炎の少年」

フレアはあわててうけとる。それは真剣ではなく木刀だった。

「おぬしの道、のろわれておる。それで切り開いてみせろ」

そのまま後ろをむき、防風林の中を歩いていった。

「ふう」

レンが座り込む。

「びびったあ、剣さんだよ、つるぎさん」

「だれなの、あの人？」

そういうフレアはわたされた木刀を見る。

使い込まれていて、さらにこの木刀じたいエネルギーを感じる。

木材もみたことのない木で作られていることがある。

今使っていたフレアの木刀は１０本めくらい。

修行で折れては買いなおしていたので木刀にはそうとう詳しかった。

だけど、今回のは肌触りも材質もちがかった。

だけど、それ以上に気になるのは、自分の道がのろわれている、ということだった。

（どういう意味だ？）

しかしフレアはそこで考えをやめた。

ただのセリフだったかもしれないし、後に重要なことかもしれない

が、今、それは関係ない。

「あの人はあれだよ、斬の副隊長」

レンが答える。

「…マジで！？」

びっくりするフレア。

「あの人にはね、いろいろ感じるんだよ。みるんじゃあない」

レンがうれしそうに言う。

「いやあ、でも名前覚えていてくれたよ。兄貴は上の救助隊でも有名だけどさ、俺までなんて」

「つるぎさんは強いの？」

フレアが質問を言う。

「強いよ。ほんと。俺じゃぜんぜん手も足もでない」

レンが拳をつきだして言う。

「斬はプクリンやフレアーズに劣るっておもわれがちだけど、やっぱ強い。でも兄貴もつよい」

「兄貴って、ルーズ？」

「ああ、剣さんだって俺のこと兄貴を通して知ったんだと思う。昔一度兄貴に連れられていったとき、斬のメンバー全員にあってさ」

レンがうれしそうに言う。

「斬はメンバー多いんだ。５０人くらい。隊長の刃、副隊長の剣、小隊長が５人、凛、爆、翔、鳶、存。で、小隊長のしたに何人かいるんだ」

「フレアは斬だとどのくらいの位置？」

「いや、たぶん小隊長にも勝てねえよ。だから格下だな。兄貴なら

隊長と戦えるとおもう」

「へえ」

フレアは自分が井の中の蛙と思い、ちょっと恥ずかしくなった。

「うし、じゃあおれらはぷらぷらしてっか。あっちに町があったからな」

「うん」

フレアがうなずいた。

「あ、レン、ゲームセンターだよ」

「おおおおしゃあああああ！コイン全部ぶんどってやる！」

夜１０時
防風林の中
「よ、よーしみんな、突入だあ。ぐすぐす」
ゲームに夢中になっていたら有り金を使い果たしてレンが言う。
「おい、ゼル兄ぃがいないぞ」
キルが言う。
「一緒じゃなかったのか？」
「いや、途中で分かれた」
なにやってんだ、とレンがおもった。
が、次の瞬間工場で大きななにかぶつかる音がした。

「なんだ！？」

フレアが反応する。

すると、声がした。

「ひゃはははは！おりゃあ！ホッパーズのおとおりだあ！亜空間装置出しやがれぃぃぃ！！だせねえと俺様の氷でカチンカチンんにしてやるぜえええ！！」

どう聞いてもゼル兄ぃの声だった。

「…あれさ、段取りさ、うち地図丸暗記したからテレポートで行こうって話しだったよね」

冷や汗をかきながらキルが言う。

「…ああ、倉庫室かなんかにとんで、最初はばれずにやろうってはなしだったよね」

冷や汗をかきながらレンが言う。

工場からは警告音が鳴り響く。
ウ～ウ～

「よし」

レンが覚悟を決める。

「ゼル兄ぃにまかして逃げよう！！」

「おう！」

「…とおもったらフレアがダッシュでつっこんでったあ！！」

フレアはゼル兄ぃのあとを追い、埋立地のうえを走る。

「…キル、テレポートで一番小さい部屋へ」

「…おう、わかった」

キルとレンはテレポートした。

「なんか、へんなやつが工場に来たなあ」

カイリキーがレントラーの改良された亜空間装置をながめながら言った。

「レントラー、放送でマグマラシとアリゲイツに呼びかけろ、警戒態勢だ」

手話でレントラーに話した。

「ああ、引越しすりゃあよかった」

モニターでゼル兄ぃの氷で壊せれていく工場をみながらカイリキーはぼやいた。

ｖｓマグマラシ

「おるううあああああ！！」

ゼル兄ぃの氷が工場の壁をつぎつぎ破壊する。

「ふう」

瓦礫を蹴り飛ばしながら中へ入る。

後ろから足音が近づいてくる。

「ゼル兄ぃ！」

びっくりして後ろをむくとフレアだった。

「おお、どうした？」

フレアがむっとなっていう。

「段取りが違うじゃないか。本当はこっそりいくつもりだったのに」

「いやいや、これは陽動作戦だ」

ゼル兄ぃが説明する。

「おれっちが目立っていけばさ、残りの奴らは気づかれなくね？みたいな？」

「いや、でも」

口ごもるフレア。

「そもそもなんでお前ついてきたんだよ」

めんどくさそうにゼル兄ぃは聞く。

足手まといと一緒じゃあねえ、と思っていた。

「それは、ゼル兄ぃが心配で…」

「伏せろ！」

ゼル兄ぃがフレアを手で無理やり伏せさせた。

すぐ上を弾丸が通り過ぎる。

「どーやらてめーがしゃべってるときに敵はよくくるもんだな」

フレアが工場を見上げると、壁で崩れた中の2階部分から銃を構えたマグマラシが出てきた。

「こちら2階付近、なぞのフローゼル発見」

マグマラシが携帯電話で話している。

「おい、フレア」

ゼル兄ぃが話しかける。

「お前本当にホッパーズの力になりてえんだったら」

ゼル兄ぃの目が恐くなる。

「先いって来い。ここは任せな」

フレアがうん、とうなずく瞬間にゼル兄ぃが消えた。

「いくぜ」

（足手まといなんとか振り払えたあ）

ゼル兄ぃのまわりに多量の水が纏われる。

「はやっ」

マグマラシがつぶやくそのまえにゼル兄ぃが2階までジャンプで着き、アクアジェットで相手にぶつかる。

マグマラシがふっとぶ。

「さあ、はじめようぜ」

ゼル兄ぃが手を広げたとたん、2階の部屋らしき場所の壁が凍り始めた。

（こいつ強い）

マグマラシはあせった。

「ここかなあ?」

フレアは壊れた壁から1階に入り、いろいろな部屋をみてまわる。
広さは無いが、初めての場所なので迷ってしまう。

「う〜ん」

目標は亜空間装置の破壊だから無駄な戦闘は避けたい。
すぐにみつけてぶっこわして終わりにしようと考えていた。

すかさずフレアはゆっくりと兜にふれる。

（今、音がした）

フレアの兜が音を捉えた。

「心眼流”雷弾”」

小刀をとりだしたフレアは雷をまとわせ、壁につきさした。

が、小刀ははじかれてしまった。

「！！」

「よお、坊頭」

壁を突き破って出てきたのはアリゲイツだった。

「てめえひとんちで遊んでんじゃねえ！！」

アリゲイツがナイフを投げる。

そのナイフの周りに氷でできた分身のナイフが数十本現れる。

そのままフレアにむかって集中して襲い掛かる。

（…よけなきゃ）

右に一歩踏み出し、左へ3歩。そのままジャンプ、刀で叩き落す…
などと適正にあったかわしかたをするフレア。

「おらあああ！いくぜぃぃ！！」

アリゲイツが今度はサーベルをもって突進してきた。

（突きの構えか）

フレアは愛用の木刀を構える。

そのまま地面にたたきつける。

簡単な地震が起きる。

これで足元を崩そう、と考えたのだが。

「きかねえ！」

関係なくつっこんでくる。

（だったら）

「ほのおのうず！」

アリゲイツをほのおで囲む。

そのすきに間合いをとり、木刀に雷をまとわせる。

「心眼流”雷柱”」

そのまま、作戦を考える。

（このまま思いっきりつっこんで攻撃するか？いや…）

そのとき
大量の氷ナイフがほのおのうずを突き破りさまざまな方向に、しかも大量に飛んできた。

「うわ！！」

ほのおのうずなど関係なく、３６０。全方向に氷が飛ぶ。

フレアのとこにやってきたナイフはなんとか木刀ではじいた。

とりあえず相手の攻撃がとまった。

が、次は大量の氷ナイフがフレアにだけ飛んできた。

（しまった、さっきの声で場所が悟られたしまった）

いそいでよけようとするが、足が動かない。

足が凍り付いていた。

みると、ほのおのうずからレイトウビームが伸びていて、フレアの足を凍らせていた。

「や、やべ」

早速氷のナイフが一発、フレアの肩に当たる。

「いたいっ」

次にきたものは木刀で受ける。

が、つぎのナイフも右のひじに突き刺さる。

「ぎゃ！」

出血はしない。氷で抑えられている。

が、またこんどはかぞえきれないほどやってきた。

（や、やばい）

ある程度は打ち返すが、また5本くらい体に突き刺さる。

（いったぁあああ！！）

「うあああ！！」

痛みに耐え切れず、声を漏らす。

さらに３０本ぐらいとんできた。

「ちくしょう！！心眼流奥義！！”大文字切り”！！」

いたみで目に涙がたまる。もうどうしようもない。

フレアが木刀を一振りすると、フレアにほのおがまとう。そして木刀にはほのおでできた大の文字が。

「あああああ！！」

そのまま大量のナイフをひとふりで叩き落す。

さらに足元の氷がとけ、自由に動けるようになる。

相手もほのおのうずからぬけだしたようだ。

「くらえー」

そのまま木刀をふりかぶろうとしたとき、木刀が動かなくなっていた。

木刀をみると、ナイフで木刀ごと壁につきささっている。

相手を見ると、ナイフを突き出した格好をしている。

（こいつ、いつのまに）

そのまま木刀は燃え尽きてしまった。

奥義”大文字切り”は木刀でおこなうと最終的に燃え尽きてしまう。

（だったら、剣さんの剣で）

フレアは剣からもらった真剣をとりだす。

初めての真剣はずっしり重かったが、素振りを毎日行っていたのでそんなに違和感が無かった。

「心眼流”雷柱”！」

唱えると真剣が雷に覆われて、１本の雷の剣のようになった。

（すごい、ほんといい刀だ）

「なんだ、まだ本気じゃないのか。この野郎」

にやりと笑みを浮かべるアリゲイツだった。

「テレポート！」

レンとキルがついたのは倉庫のようで、ダンボール箱がたくさんおいてある場所だった。

「うし、じゃあ５０万のためがんばるかー」

レンが堂々と部屋から出た。

「待てよ」

キルが追いかける。

すぐ出たら廊下になっていた。

「お前、気配消せ」

レンが言ってきた。

「でもそれ纏い技の応用じゃん。うちは無理」

「ちっ、じゃあいいよ」

そのまま大またで歩く。

さまざまな部屋を調べ、ようやく社長室にきた。

「じゃあ社長さんにきいてみますか。亜空間装置の場所」

のんきにレンがドアを開けた。

「いらっしゃい」

部屋にいたのはカイリキーとレントラーだった。

「あー、すいません。亜空間装置ありますか？」

「あ、はいありますよ」

カイリキーがボールのようなものを2つとりだす。

「新型と旧型どっちで？」

「じゃあ旧型で」

そういった瞬間、カイリキーの右手にもっていたほうを投げる。

するとボールの周りからブラックホールのようなものが現れた。

（これがそうか…）

「キル、よけろ！」

レンがとっさに横にでる。

「くっ」

キルもレンとは反対方向にさける。

「ぽちっと」

カイリキーがリモコンを押す。

すると亜空間がさらに大きくなり、段々とキルに近づいてくる。

「なんだよこれ！」

キルが銃でエスパーの弾を撃つ。

しかし、亜空間に飲み込まれてしまった。

「きいてねえじゃん」

今度は後方によけながら亜空間を打つ。

しかし、また飲み込まれる。

キルが壁にぶつかった。

「いて！」

それを見計らってか亜空間がキルに近づき、吸い込もうとした。

すでに右手が吸い込まれようとしている。

「あああああ！！」

「！！キル」

レンがカイリキーに殴ろうとしていたとき、キルの悲鳴で振り返る。

「おらあ」

よそ見したレンはカイリキーに殴られる。

「ぐっ」

後方に押されるが、なんとか持ちこたえた。

「キル、無事か！！」

が、返事はない。

さっきキルのみたほうをむくと亜空間しか残っていなかった。

ｖｓアリゲイツ

「なんか気乗りしないなあ」

ゼル兄ぃが言った。

「おれっち女の子いじめんの趣味じゃないのよ」

目の前にはぼろぼろのマグマラシがいた。

が、目はまだ戦う気であった。

「もうやめろって、おまえじゃおれっちにかてねえ」

そういってゼル兄ぃが手を横に振ると壁の氷から氷の刃が伸び、マグマラシの顔の近くで止まった。

「わるいがこちらは仕事なんでね、殺す気でいるよ」

ゼル兄ぃの目から情が消えた。

「人を殺す道具つくってるやつが一番許せなくてね」

マグマラシが氷の刃をどかせ、そのままマグマラシに接近して一発ぶん殴った。

マグマラシの口が切れて血が出る。

「殺されるやつは死ぬから可愛そうだ。道具使って殺すやつだって普通のやつだったら罪悪感を感じる。もしかしたら罪悪感につぶれ自殺するかもしれない」

そこでいったん息を吐き、ふっとんだマグマラシにまたちかづき反対方向へ蹴り飛ばす。

「でも道具をつくるやつは儲かるし、なんとも思わないからな、たちがわりいんだ」

マグマラシはそれでも立ち上がってきた。

（おいおいまじかよ。おれっち女の子いじめてんじゃねえかよ。あばら一本はいったぜ）

「今から一回だけ発言の猶予を与えるよ」

ゼル兄ぃがもう一度手を振ると今度は床から氷がのび、マグマラシの手足の絡みついた。

「なにかいいたいことは？ある？それによっちゃあ生かしてやるよ」

「じゃあ、交渉しないか？」

そこでマグマラシは笑みを浮かべた。

「ぎゃ」

フレアがおもいっきりふっとんだ。

さらに左腕から流血する。

血をみて恐くなったフレアは、それでも右手で刀をつかむ。

（痛いし恐い！恐い！）

わき腹、右足のふとももも、左足の傷はさほど深くなかったので血はすでに止まった。傷があるだけだ。

しかし今回のは深かった。それをみてフレアはおびえる。

「お前、それが限界じゃねえだろうな？」

サーベルをかまえアリゲイツは言う。

このサーベルにフレアは必死になっていた。

真剣を構えて心眼流”雷柱”を使ったときは勝てると思った。

タイプの相性、自分のとくいな剣道。

体力的には傷を負っていたがなんとかなるだろうとおもった。

しかし、アリゲイツのサーベルはそんな単純じゃなかった。

というか、単純に強かった。

アリゲイツのサーベル一振りでふぶきを吹かした。

それにより、フレアは一瞬動きが止まる。

するとアリゲイツが一気に接近してサーベルで斬りつける。

そんなことばっかり繰り返した。

けっか、アリゲイツは無傷のままフレアは傷まみれだった。

（単純すぎて作戦がおもいつかない）

レンだったらこの場をどうするか。

裂空という技でふぶきもろとも突き破るだろう。あるいはふぶきなど関係なくみきりでかわすかもしれない。

ゼル兄ぃだったらたぶん間接的に攻撃するだろう。あの氷分身とかで。

キルにはリフレクターと光の壁があるから防げるとおもうし、遠距離攻撃でなんとかなるかもしれない。

そこからわかるのは、自分にたりないのは吹雪を防ぐ防御技と相手に攻撃する間接的攻撃技だ。

しかし小刀に雷を纏わしてなげる心眼流”雷弾”はふぶきにはじかれた。

もしかしたら、それ以前に自分の力不足かもしれない。

もしその3人ならふぶきなんて関係なくつっこんで攻撃して終わりだろう。

だったら今自分にできることは？

でんこうせっかで翻弄してみるか。

おおよそのデータはわかった。

相手はフレアを斬りつけ、そのあとまたふぶきをうつまで約5秒。

その間、アリゲイツは吹雪をうつための力をためている。

その間、フレアはふっとばされれいる。

じゃあどのタイミングででんこうせっかを？

吹雪と相手の攻撃の間か？

でもふぶきで自分は動けない。

だったら吹雪をうたれているあいだ、ほのおのうずを自分のまわりにまとわせれば？

なんだ、防御技なら自分にだってある。

相手の吹雪がせまってきた。

「ほのおのうず！」

ほのおのうずでふぶきからみを守る。

（よし！よし！守れてる！）

そのままふぶきの音がやむ。

（いまだ！）

でんこうせっかでほのおのうずから出た。

「なに！？」

でんこうせっかをみてアリゲイツが声を上げる。

そのままでんこうせっかでありげいつの後ろをとる。

「もらった―」

そのまま真剣をふりかざし攻撃しようとする。

が、アリゲイツも一瞬で振り向き、突きの構えをした。

（僕が斬るのが速いか、相手が突くのが速いかだな）

「おおおおおお！」

が、どちらでもなかった。

フレアの攻撃は別の刀でとめられ、アリゲイツのサーベルは真っ二つに折れてしまった。

そして二人の間に立つのは、どこから一瞬で現れた剣だった。

「二人とも、命のやりとりするにはちと幼いな」

「剣さん！」

「なんだてめえ！」

アリゲイツがきれて氷のナイフを剣に向かって投げる。

が、簡単に剣は手で掴んでしまう。

そのまま握力で砕いてしまった。

「悪いがこの少年は傷を負っているのでね、私の友人の隊員なので殺させるわけにはいかない」

剣は腰から2本の刀を抜き、両手からリーフブレードを2本ずつだして構えた。

「そのかわりといってはなんだが私が戦おう。私なら殺しても構わ

ん。しかし、この少年には手出ししないでくれ。べつにいいだろう貴方は無傷なのだから」

アリゲイツはややこしい言い方に首をひねるが言った。

「いいぜ、強いやつ戦いたいんだ、俺は。本気で戦えるやつがいいんだ。わくわくすんだよ」

そういって予備のサーベルを振りかざし、ふぶきをはなつ。

剣は電光石火で範囲からはなれ、そのままアリゲイツの後ろをとった。

「リーフブレード」

一瞬にしてアリゲイツはきられてしまう。

「があ！」

しかしアリゲイツは後ろを向き氷のナイフを数本投げる。

が、それを全部切り落とす剣。

「天滅流”草印斬”」

右手の真剣が竜のようにするどく鳴く。

その刹那アリゲイツに刀が入った。

が、外傷なく刀はアリゲイツの体から抜けた。

「おお？」

アリゲイツが不思議そうにいう。

「お前の負けだ」

剣が言った。

「今の技は相手の中のエネルギーを体中に送る管を切る技だ。お前はもう氷ナイフや吹雪を出すことはできない」

「うっせー！！」

よくわからん話にアリゲイツは腕を振るが、なにも起きない。

「なんでだ？」

「話がわからないのか。だからようするにお前のエネルギー菅を切ったんだ。お前はエネルギーを作ることはできるけど、体の外には出せず、体の中で漏れてしまう」

その言葉に逆切れしたのか、

アリゲイツはサーベルを剣に刺そうとした。

しかし剣はそれを左手のリーフブレードではじく。

「さあ、じゃあ次は貴方だな」

「なんのだ？」

そういうと剣はにやりと笑った。

「少年の仕返し」

リーフブレードがアリゲイツの右手を切り裂く。

なにが起きたかわからないアリゲイツは自分の右手から鮮血があふれているのに気づく。

「……わああ！」

アリゲイツはびっくりしたがとっさに右手でサーベルを持ち、斬ろうとする。

が、剣はそれを口でおさえて噛み砕く。

「言っておくが、エネルギー菅の再生は訓練をしていれば１０秒で直る。だが、訓練をしていないやつは基本１週間だ」

剣はサーベルを吐き出しながらいった。

「残念ながら貴方とはレベルが違う」

その目は威嚇には十分だった。

アリゲイツは傷ついた右手を押さえ後ろをむき走っていった。

「…剣さん、すげえ！」

フレアが声をあげる。

「そうだった、傷はだいじょうぶか少年！」

剣があわてて声をだす。

「いや、痛いけど、大丈夫だよ」

「そうか、ならいいが」

剣はそこで刀をさやに収めた。

「おおおおいいい！！！剣さん！」

不意にゼル兄ぃの声が聞こえる。

そしてアリゲイツがこちらへむかって走ってきた。

「仲間があ！！あいつに捕らえられている！助けて！」

必死の形相で訴えてきた。

たしかにゼル兄ぃの隣に手を氷で縛られたマグマラシがいた。

「ばーか、今から交渉すんだよ。探したぞ？しかも剣さんとあうなんて」

ゼル兄ぃが言う。

「交渉？」

フレアが言う。

「ああ。つーかフレア大丈夫か腕？」

そこでマグマラシが前にでてきた。

「アリゲイツ、私は無事だ」

「ばかやろう、俺以上にぼろぼろじゃねえか！フローゼル、殺すぞ」

アリゲイツが叫び声を上げる。

はっきりいってフレアはアリゲイツの鮮血で恐いとおもっていたが、
マグマラシの姿をみて思わず泣き出しそうになった。

生傷から大量の血が流れている。歩いたあしあとが残るほど。

「いや、今はいい。とっとと交渉する」

マグマラシが言う。

「フローゼル、私がいった命だけ助けてもらいたい友人はこのアリゲイツだ」

「そうか」

ゼル兄ぃが納得そうにいう。

「交渉って？なにをだ？」

アリゲイツが言う。

「私たちの命を助けてもらう代わりに亜空間装置の場所を教えるんだ」

アリゲイツがそれをきいて目を丸くする。

「お前、なにいってんだ。亜空間装置を守るのがおれらの使命だろ」

「私には関係ない。いずれここの工場をのっとるつもりだから」

「お前それ、まじでいってんのか？」

「まじだ。あのカイリキーのおっさんには感謝している。親なし身寄りなしの私たちに住むとこと働くことをくれたのだから」

「じゃあ、そしたら」

「でも私の夢とお前だけは優先させたい。お前もぼろぼろじゃないか。だったらこんなくだらん戦いで命を落とす必要はない」

「でも俺はあのおっさんを裏切ることはできない。死んでもおっさんは裏切らない」

「だったら私一人だけ助かることなんてできない。助かるのも死ぬのもお前と私一緒がいい」

「ばかやろう、まずやるのは亜空間装置をまもることだろ、」

「いや、よく考えろ。こいつらはおっさんを刑務所にぶっこんでくれる。でも、私たちはこいつらに保護されなんの処罰を受けない。そして残るのはからっぽの工場。それを私とお前でのっとるっていうわけだ」

「お前、本当にそれでいいのか？おやっさんを裏切っても」

「ああ、お前のためでもある」

そこまで緊張気味に話し合っていた2人だが、アリゲイツがほっと顔を緩ませた。

マグマラシはそれをみて安堵する。

「じゃあ死ねよ！！」

アリゲイツの氷ではない得意のナイフがマグマラシの腹に深く突き刺さった。

瞬間、マグマラシの腹から鮮血があふれる。

マグマラシは口に鉄臭いのを感じて思った。

（やっぱこいつは何考えてんだかわからん）

「てめえ!!」

ゼル兄ぃが瞬間的にアリゲイツを蹴り飛ばし、頭をつかみ床にたたきつけた。

フレアは思いっきり目をつむったが血の臭いが鼻をさす。

剣はいそいでマグマラシを寝かした。

ナイフは刺さったままだ。

（抜いてはいけない。よけい出血する。しかし腹はやっかいだ。間接止血法がない）

剣はバックから布を取り出した。

（抜くしかない。圧迫法で血を止める）

剣がナイフを抜く。血が剣の顔にかかる。

が、いそいで布をあて圧迫した。

マグマラシは気絶しているようだが、アリゲイツと何度もつぶやいている。

フレアは肩をたたかれた。ゼル兄ぃだ。てには手足を凍りづけされたアリゲイツが握られていた。

アリゲイツは気絶していた。

「フレア、こいつをたの…」

だが、フレアも気絶していたのに気がついた。おそらく疲労とショッキングな場面でバタンキュウだろう。

仕方なく、剣に頼む。

「剣さん、そのマグマラシとフレアとアリゲイツを頼みます」

「ああ、いいよ」

そこでゼル兄ぃはなんでこんなところに剣さんがいるのか不思議におもったがまあいいやとおもい走り出した。

「どこいくんだ!?」

剣が聞く。

「ちょっとうちの副隊長んとこいってきまーす」

亜空間消滅（前書き）

急いで書いたので誤字、脱字、あと話が抜けているかもしれませんが、そのときはほんとすいません。

フローゼルがいなくなったのを見て、マグマラシはジュプトルに聞いた。

「おれは、死ぬのか？どう、なんだ？」

自分ではありったけの声量でいったつもりだったが、声がかすれかすれだった。

硬い床に足があたるをを嫌がっているマグマラシを見て剣は答えた。

「ああ、大丈夫だ。だからしゃべるでない。それと女の子の『おれ』は感心しない」

ジュプトルが携帯で話しながら言った。

マグマラシの視界には、のびているアリゲイツが見えた。

（へへ、ざまあねえなあいつ）

マグマラシはにやりと笑った。おれを殺ろうとしたからだ。

「なあ、お前はそれより社長のとこいかなくていいのか？」

マグマラシが聞いた。

剣がマグマラシの傷を抑えながら聞いた。

「ああ、レンというやつが倒すから問題なかろう」

「…つーかついさっきまで標準語でしゃべってなかった？」

「きにするでない。俺もしゃべりづれーけど、雰囲気つくりだ。じゃ」

マグマラシはあきれた。なんだこいつ。

「いや、でも社長は強いよ。それも総合的に」

「それでも大丈夫だ。レンはちと違法に手を出しているからな」

違法という言葉に引っかかった。

「それはなんだ？」

「それはだな、あ」

そこまでいった瞬間、テレポートでエルレイドとキレイハナがやってきた。

「剣さん、すいません遅れてしまって」

エルレイドがぺこりと頭を下げる。

「剣さあああん、あいたかったよおおおお」

キレイハナが剣に抱きついてくる。

それを軽くよけるといった。

「凛、治療してもらいたいのはこいつだ」

剣がマグマラシを指していう。

「わかりました」

凛と呼ばれたキレイハナはマスクをし、ゴム手袋をする。

「翔、アルコール消毒液ある？」

「ああ、あるよ」

翔と呼ばれたエルレイドがビンを渡す。

マグマラシは急に現れた人ばかりでびっくりはしていたが、どうやらこの人が治してくれるそうだった。

「どれくらい時間がかかる？」

剣が聞く。

「あと３０秒です」

キレイハナの凛がそういった瞬間、マグマラシに眠気が襲った。眠り粉だった。

今聞こえるのはメスがマグマラシの腹に入っていく音だった。

が、すでに凛は縫い始めている。

血管同士、筋肉の神経同士を。

それも１０秒たたないううちに終わり、腹もすぐ縫い終わった。

「終わりです」

キレイハナがマスクをはずしていった。

「あの手術で使った糸はそのうちからだにしみこんで消えるので大丈夫です」

「お疲れ」

剣が言った。

「翔、本部に帰るぞ。そこの赤い少年とアリゲイツも連れて」

「わかりました」

「キル！亜空間に吸い込まれたか？」

レンが叫んでも返事は来ない。

「ああ、吸い込まれたよ」

カイリキーがけろっと言った。

カイリキーはさらにボタンをおす。

今度はレンにむかって旧型の亜空間装置が近づく。

「あそれ」

レンは急いで距離をとった。

そしてそのままのステップで一気にぼーっとしているレントラーに近づいた。

「じゃあキルの分はこいつだな」

レンがからだをひねらせた。

レントラーはいまだぼーっとしている。

「レントラー！」

カイリキーが叫んだ。が、耳が聞こえないレントラーは反応しない。

「メガトンキック」

ものすごいうなりがなり、レンの蹴りがレントラーの腹部を襲った。

「!?」

レントラーは声にならない声を上げ、壁に激突し、さらに壁がへこんだ。

「がはっ」

そのまま嘔吐し、ずるずる床に落ちていった。

「いくぜえええ!」

そのままの勢いで今度はカイリキーに近づく。

「なめるなあ!」

カイリキーは４本の腕を構えた。

すると、レンは近づいてかいくぐるようにアッパーをはなとうとした。

しかしこれをカイリキーは右手の１本でうけ、そのままレンの右手を離さなかった。

そしてカイリキーのもう一本の右手がレンに襲い掛かろうとした。

レンは体をやわらかく曲げ足で受ける。

すると今度は左手２本が飛んできた。

（これは無理だ）

レンはそうおもうと左手でメガトンパンチの構えをした。

（ただでぶっとばされるなら一撃でもあてとくか）

レンのメガトンパンチがカイリキーの腹を捕らえる。

しかしカイリキーの2本の左手のからてチョップがレンの顔に入る。

「げぼっ」

からてチョップの勢いで床を転がる。

（ち、ちきしょう、とんでもねーばかぢからだ）

すでに鉄の臭いが鼻からする。顔をぬぐうと鼻血がべっとりついていた。

「お前のような華奢な肉体で戦いをするんじゃあない」

カイリキーは亜空間装置のスイッチを切って、投げ捨てる。

やがて1つの亜空間装置が止まった。

「よくこう、漫画でほっそりしているやつがめちゃくちゃ強いのを見ると腹たってしょうがない」

「…なんの話だ？」

まあ、確かにカイリキーは筋肉隆々としていてたくましい。

いっぽうでレンはたしかにほっそりしている。

（でもこちらはスピードを上げるために無駄な筋肉落としてんだ。
そしてそんなパワーなくたってエネルギーで戦ってんだよこっちは
よおおお！）

レンは鼻に力をいれ、たまっていた鼻血をだす。

（やべえ、でも強いのは確かだ…）

カイリキーはレンが来るのを待っているのか、あぐらをかいている。

（亜空間をさきにぶっ壊すか…）

レンが旧型の亜空間を見る。

（裂空で打ち破れるかな…）

と、右手にチャージをし始めたときだった。

「テレポート！」

キルの声が響いた。

右手にマシンガンのようなもの、左手にアルセウスに言われたライチュウを抱えながら。

「ようやくきやがった」

レンがむすっ、という。

そもそもレンがキルを心配したふりをしたのは相手からキルを考えなさせないためだった。

キルは亜空間装置の中からテレポートで出てきたのであった。

「お！」

カイリキーは驚く。

キルはカイリキーの目の前にテレポートをしたためだ。

「おらあ！」

キルがマシンガンの引き金を引く。

が、片手のためぶれが大きい。

「こしゃくな」

カイリキーがエスパーの弾丸をかわしながらキルにダッシュで近づく。

「裂空！」

レンがためていたはどうだんの三日月形の裂空を、カイリキーの横からはなつ。

カイリキーはそれに気づきしゃがんでよける。

「ビンゴ！」

裂空はそのまま旧型の亜空間に激突した。

裂空が亜空間を切り裂き、亜空間装置本体も切り裂いた。

そのままカイリキーに近づいた。

が、カイリキーは腰からなにかとりだした。

「らぁ！」

それはピストルだった。

弾丸が迫ってくる。

「ちっ」

レンはそれをみきりでかわす。

が、反動で動きが止まる。

「おらららっら！」

カイリキーがピストルを乱射してきた。

しかもよくみると、弾丸はほのおだった。

（ちきしょう、タイプ固めてきやがった）

レンが舌打ちをする。

「ひかりのかべ！」

キルが叫ぶ。

レンの前にひかりのかべがあらわれた。

「ナイス、キル」

レンが切羽詰った声で言った。

ひかりのかべが弾丸をすべて打ち落とした。

「かわらわり」

カイリキーがひかりのかべをやぶり、レンにかわらわりをあてにきた。

（避けきれない）

そう思ったレンがすぐ攻撃に転じる。

「メガトンパンチ！」

玉砕覚悟でメガトンパンチをカイリキーにはなった。

お互いの腹にそれぞれ打撃を加えた。

そして、お互い距離をとる。

「キル」

レンが呼ぶ。

その目はめずらしく真剣だった。

「さき、テレポートでライチュウとそこのレントラーといっしょにアルセウスのとこいってろ」

気絶しているレントラーを指していった。

「でも、レン」

キルが心配そうな顔をする。

「カイリキー、行かしてもいいよな」

カイリキーはうなずく。

「いいだろう、そのかわりお前えは俺と戦えよ?」

レンがキルを見た。

「お前、足が亜空間に吸い込まれた時に駄目になってんだろう、だから、早く帰れ」

たしかに、キルの足は吸い込まれた時のショックで麻痺していた。

「そこまで、言うなら、かえってやるよ」

キルが覚悟した目でレンを見る。

「ただ、ちゃんと新型の亜空間も破壊しといてね」

そういってキルがテレポートで消えた。

（あ、すっかり忘れてた）

「さて、いいかな」

カイリキーが拳にエネルギーをためながら言った。

「私は覇を使うものだ。みただろ、さっきの攻撃力」

カイリキーの周りにエネルギーが宿る。

「いや、俺もいちおうさっきから覇使ってんだけど…」

レンがそうつぶやくとカイリキーは言った。

「そんなことはしっている。だが、エネルギーが弱すぎて話しにならんがな」

レンは確かに、と思った。たしかに今のままじゃあ、カイリキーには勝てない。

そう思った一撃があった。それはさっきメガトンパンチとかわらわりの交換パンチのときだった。

はっきりいって、骨が折れててとても痛い。

（けっこう、いろなところいてえな）

鼻血がまたたれてきたのに気づき顔をしかめる。

（しょうがねえ、あんま使いたくなかったけど）

「カイリキー、死ぬんじゃねえぞ」

「ん？」

カイリキーが聞き返す。

「開放！！」

レンが叫んだ。

「そういえばさ」

斬の本部にある医療室に運ばれて、すぐ目が覚めたマグマラシが通りかかった剣に聞いた。

隣のベットにアリゲイツが寝てるので軽くいらいらしていたが。

さらにマグマラシのベットはかるく血でくすんでたやつなので怒りを抑えながら。

「さっきききそびれたんだけどレンってやつの違法?に手をだしたってどういうこと?」

剣が気づいて、言った。

「大蛇(おろち)を埋め込んたんだ、あの少年は」

レンの腕が黒くおぞましい姿に変わっていく。

さらに足、そして顔。

後頭部はとげとげしたものがたくさんついている。

うでにはふとい毛が生え、足はたくましい姿になった。

ところどころに白い傷跡が見える。

そして目には負の光が宿る。

「なんだ、それは」

エネルギーが一気に増えたレンを見て、カイリキーが言った。

「9体いる大蛇のなかの一匹、黒の大蛇だ」

レンが苦しそうに答えた。

（やばい、きもち悪っ）

「おえっ」

レンが嘔吐する。エネルギーに体がついていけない。

「おら、いくぜえ」

かすれた声でレンが言った。

「なるほど、普通の使い手ならその弱ったからだに油断するだろう。しかし俺には見える。半端ないエネルギーの量、しかもどのタイプにもあてはまらない色が」

カイリキーが覇を強めながらいった。

「お前、そこまでわかんのか、つええな。だったらカイリキー、もう一回言う。死ぬなよ」

瞬間、レンが消えた。

（右）

カイリキーが感づいて右に構える。

「―とみせかけてのひだり」

レンが現れた。

驚くカイリキー。

「一発できめてやらあ」

レンが裂空を両手に２つ構え、そのまま解き放つように押し出す。

「裂空！！」

自分の腕が吹き飛んで、カイリキーは思った。

（やっぱ、引っ越せばよかった…。）

カイリキーが倒れ、床が揺れる。

レンの裂空にまきこまれ、新型の亜空間装置も壊れてしまった。

「づあああああああああ！！」

レンが倒れこむ。鼻血が鼻筋を通る。

目の前には両腕が吹き飛び、気絶しているカイリキーがいた。

しかし、出血はしていない。

それは、裂空が綺麗にきれすぎたためだ。

（やっぱ大蛇は開放したくなかったな、いや、つかわないと負けてたけどね）

やがてレンの意識が薄れ始めた。

「レン！！、お前、大蛇使ったのか！」

いつの間にやら現れたゼル兄ぃが叫ぶ。

が、レンは返事をしない。

しかしカイリキーの様子をみると大蛇をつかったのが見え見えだった。

「レン！」

ゼル兄ぃがレンを抱え込もうとする。

しかし、肋骨が折れてることに気づき、あわてて降ろす。

「そこのフローゼル」

カイリキーが弱弱しい声でゼル兄ぃに話しかけた。

「俺はこの工場で死ぬ。だから、早くでていけ」

ゼル兄ぃが返した。

「ばっきゃろー、命粗末にすんじゃねえ。ほんとに反省してるなら牢屋でせっせと働きな」

ゼル兄ぃは警察と救急車を依頼書を運ぶペリッパーで呼んだ。

「ま、依頼完了だな」

ふう、といってゼル兄ぃは腰を下ろした。

そこから救急員をまとうと思っていたためだ。

が、それと同時に殺気を感じた。

（…すっげえ殺気）

やがて、救急員が現れたのを目の端に見えた。

それを確認して、手を振って気づかせる。

救急員を気づいたのを見て、ゼル兄ぃがダッシュで工場を抜け出した。

ゼル兄ぃが工場の近くの林に着いた。

空は真っ暗だった。

満月が浮かんでる。

ゼル兄ぃは大声でいった。

「そんなに強い殺気だしてたら、一般人にも気づかれまくりですよ、ルーズ隊長」

「え、そう？いやあ、力入れすぎちゃった」

ゼル兄ぃのそばに現れたのは、レンの兄であり、ホッパーズの隊長のヤミラミ、ルーズであった。

「なんでこんなところいんですか？」

ゼル兄ぃが聞く。

「いや、３０００年前に封印されたはずの大蛇の臭いがしたからね、ちょっと」

ルーズが頭をかきながら言う。

「レンが自分にうめこんでんですよ。隊長をこえるために」

「ふーん、どうやって」

やがてレンとカイリキーが工場から出されて、車に乗せられて病院へむけて出発した。

ゼル兄ぃが緊張しながら言う。

「そりゃあ、もちろん、封印してるところ言ってよびだし埋め込んだんですよ。自分の体に」

「…そ、じゃ」

ルーズがくるっりと後ろを向く。

「隊長、できれば戻ってきてください」

ゼル兄ぃが震えながら言う。

「ああ、気が向いたらな」

雨がふってもぬかるむとこもある

「はーっ、俺も５０万さわりてーよ！一番頑張ったろ、俺？」

「じゃあこれるもんならきてみろよ、そのぼっろぼろの体で」

ゼル兄ぃがあきれながら言う。

「うっせー！てめーら！俺なんかあと１０分で刑務所へアウェイだぜ？」

すっかり腕のくっついたカイリキーが隣のベットで言った。

カイリキーの腕はレンの裂空であまりにも綺麗にきれすぎたので腕一本くっつけるのに１分ほどで終わったという。

「うっせーのはてめーだああ！てめーのてっぽうだがパンチだがチョップだが発砲でこちらと５０万つかめーんだぞ！！！」

怒鳴り散らすレン。

やがて看護婦のルージュラがやってきて「あんまりうるさいと天使のキッスで眠らせちゃうぞ」
といってきた。

それですっかり黙る3人。

「ん、まあこちらといったらあんたのおかげで50万の収入だったから感謝する。一番ひどい怪我はこいつくらいだしな」

ゼル兄ぃがいつもはみせないまじめな感じで言う。

それはレンも気づいていた。

ついさっき気がついたら病院で包帯巻き巻きだった自分のそばにゼル兄ぃがいた。

が、いつものちゃらちゃらしたようすで「ようやくお目覚めかい？この大蛇やろう、無理しやがって」
とでもくるとおもったが。

「…痛むところはないか？っつたく」

と聞いてきたのである。

やがて病室に誰か入ってきた。

「へい！自分！警察！」

警官の帽子をかぶったワンリキーがやってきた。

「私、あなた、捕まえる！」

カイリキーを指差しながらワンリキーは言った。

カイリキーはむすっ、としたままワンリキーに連れ去られていった。

「で、ゼル兄ぃ。なんか話ありそうじゃないか」

レンがたずねる。

「ああ」

ゼル兄ぃが相変わらずまじめに答える。

「隊長、ルーズ隊長にあった」

「へえ」

それを見てゼル兄ぃはがくっ、となった。

「お前さ、緊張感ねえなあ。やばいよ、ルーズの隊長さん。前よりも強くなってた」

「いや、別に戦うわけでもないし、兄貴だし、そりゃあ、強いけどさ」

と、思いながらレンは拳に力をためる。

が、体が痛み出したのでやめる。

「ま、お前が気きにしてなきゃそりゃあそれでいいや。あの人たぶ

んかえってこねえと思うし」

「ああ、そうだよ。だからゼル兄ぃ、５０万とってきてくれ」

「おう、まかせな！」

そういうとゼル兄ぃは病室から抜け、廊下を歩いていった。

「やあ、フレア君」

フレアが真剣を手入れしていたら、声をかけられた。

それはエルレイド、実は斬のメンバーの翔だった。

「あ、どうも」

ここは斬の救護室だった。

エルレイドに運ばれてついたのがここだった。

「で、なにかようがあったってきいたけど、なんだい？」

「あの、この真剣やっぱ剣さんにお返しします。なんか、申し訳なくて…」

フレアは無事だった真剣を取り出し、とまどってる翔に渡した。

「いや、でもこれレアもんだよ、これ、剣さんの手作りのやつだし」

と、いいつつも翔は腰に差す。

「いやあ、でも君はまともな子でよかった」

翔が言う。

「へ？」

「いや、だってホッパーズつったら暴れまわっている雰囲気あるからさ」

ああ、とフレアは思った。確かにレンとかキルとかゼル兄ぃとかはね、元気が有り余っている。

「そういえば、あのマグマラシとアリゲイツはどこにいったんですか？」

昨日さんざん痛めつけられたアリゲイツに対しては小さな声で言った。

「ああ、なんかよくわからないけど仲直りしてあの工場で働いていくって」

「殺されかけたのに、仲直りしたんですか」

フレアがベットからおりながら聞く。

「まあ、なんか複雑なんだよあの2人。お互い施設で育ったらしいんだが、関係がね、」

「友達でもなければ恋人でもなければ憎い相手でもなければ、って感じですか？」

「まあね、それより、もう家にかえるのかい？」

フレアはうなずき、礼を言って部屋をあとにした。

「う～ん、こないね」

アルセウスが例の報酬の５０万円を抱えながらいった。

そろそろあのフローゼルがここへやってくる時間のはずだった。

やがてドアが開いた。

「すいませ～ん、遅れました」

しかし、やってきたのはキルリアのほうだった。

「あれ、君はまだ見ない顔だったね。でもホッパーズなんだろ？」

「まあ、そうです」

苦しみながらもキルは言った。

ゼル兄ぃがこっちへくるはずだったが、いくら待ってもこないので、レンに言われてやってきたのだ。

ちょうど議事堂にキルはいたから。

レンに逃げろといわれ、ついたのが議事堂だった。

そこでキルは敵のレントラーと、助けてほしかったライチュウをアルセウスの部下に渡しといてとっとと勝手に部屋を借り眠っていたのだ。

足はもうだいぶよくなり、そしてゼル兄ぃがこねえ、となったから回りに光の壁をはってアルセウスのところまできたのだが。

（くそ、防御してるのになんだよこの圧迫感は）

レンでさえ覇を使うほどの強さのアルセウスの圧迫感に絶えながらキルは報酬を受け取った。

「ところで、今回の件できみらのランクを一つぐらいあげようと思ってな、」

ランクとは、すなわち救助隊の強さを示すものだった。

ホッパーズはいまだ一番したのノーマルランクだった。

それは訳があって、ランクアップには隊長がいないとできないのだ。

そして、隊長はまだホッパーズに修行のため帰ってこない。

キルはいいです、と断りテレポートでホッパーズへ帰っていった。

そのことよりも気になることがある。

レンについてだ。

レンから聞いたが、大蛇を使ったらしい。

大蛇とは、３０００年前に封印されたなぞの生命体の一種で、全部で９匹いた。

そのうちレンは黒の大蛇を自分の体に埋め込んだ。

理由は兄貴をぶっ殺すため。

別に、レンは兄貴を恨んでるわけではないが、ただただむかつくからだという。

しかし、大蛇はレンには扱えきれないらしく、つかったあとすぐ病院に運ばれることもあった。

なのにまたレンは使った、と聞いて心配していた。

（つーかどうやってあいつは大蛇の封印といたんだよ）

が、そんな心配は無駄だったらしく、ホッパーズの本部にもどった

ら隊長の席にすでにレンがいた。

キルがはいってきたのみて、「ゼル兄ぃに会わなかった?」と聞かれた。

「いや、あってないけど…」

キルがうつむきながら言う。

その後、フレアも帰ってきたが、「僕も知らない」と言った。

「いや〜、まいったな」

「つーかレン、もう動いて大丈夫なの?」

キルが聞く。

「ん?駄目だよ。つーかまだ間接はいてえし左手は動かないし」

顔をしかめながら言う。

「でも、兄貴から電話でさ、大蛇の扱い方はゼル兄ぃに教えてもらいな、っていわれたからいてもたってもいられなくて」

「で、ゼル兄ぃはまだ帰ってこないと…」

「つーかキル！５０万！触らせろ！」

「ほい」

札束をほうリ投げるキル。

それを右手で受け取り、厚さに感動するレン。

「いーよっしゃ！５０万だ！腹減った！クチート！なんか作れ！！」

５０万をとっととクチートに渡してレンは叫んだ。

フレアは、でもそのレンの喜び方にきごちなさを感じていた。

「やべえ、きれーな姉ちゃんらがいたから遅れちまった」

走りながら未だ議事堂を目指すゼル兄ぃ。

「遅れた理由なんていおうか、いや、ここは素直にはんぱねー姉ちゃんがいたってことで…」

そこまでいったゼル兄ぃはぴたっと足を止めた。

目の前はパチンコ店だった。

しかも、旗には新台入替！の文字が。

「ま、まじかよ、今日かよここのパチンコ店」

そういって猛ダッシュでパチンコ店に入っていった。

（まってろよ、レン。５０万かせぐかんな！）

やがてゼル兄ぃの右手が回り始めた……

木刀を買いに（前書き）

そういえばお金について統一してませんでした。

すいません。いつのまにやら円でいくかポケでいくか適当で…

木刀を買いに

今日のフレアはついさっきまでご機嫌だった。

クチートからもらった給料の５万円のうち、１万円を使って新たな木刀を買いに行くためだった。

いつもとは違う、おしゃれな場所で買うつもりだった。

しかし、１週間前にパチンコにいって大負けし、すっかり５０万円のことを忘れていたヤツに尾けられてしまった。

（なんでついてくんのかな）

「いやー暇だよ、ほんと。レンがまだ体治ってないから大蛇について教えてあげられないしよ」

あれからレンはゼル兄ぃによりまた病院にぶちこまれた。

まあそりゃあまだ完治していなかったし。

そしてあと2週間は治療に専念しろ、といわれていた。

その日フレアはあの時日曜日（工場へいったのが土曜日。救助隊”斬”の基地から帰ってきて日曜日）だったのでフレアもその日は必死に休んで学校へ備えた（1時間目から疲れのため爆睡だったが）

話を戻すと、レンが病院から戻ってくるのは1週間後に迫り、フレアは木刀を買いに店に行き、ゼル兄ぃがまあついてきたと。

「ねえ、こなくてもいいですよ」

フレアが言う。

「いやだってひまなんだもん」

「いや、だってそんな一人で行けますよ」

店はロストタウンから西に向かって30分くらいでつく超有名刀店だった。

行く道はコンクリートで整備されていて、周りには木が茂っている。

ちなみにいまさらだけどこの世界に車はない。車だけない。基本は飛行ポケモンやテレポートか、あるいは自分の足で移動するため必要としない。

さすがに限界があるため船や飛行機はあるが。

「あの、ほんと周りに迷惑かけないでくださいね」

フレアが念を押すように言う

「だいじょぶだって、俺もガキじゃないんだから」

とかいって自分が一番精神年齢若いくせに、と思った。

でもなんだかんだでたよりになるのはわかっていたが。

あの亜空間のときも唯一無傷だったのがゼル兄ぃだったし、

それにゼル兄ぃの氷の技は強いと思う。

「あのさ、ゼル兄ぃが使う、周りの氷からこう、伸びて相手に攻撃する技って名前あるの？」

「ああ、あれか、ちょっと見てなさい」

ゼル兄ぃが座り込み、地面に手をかざす。

やがて地面は凍りだした。

「いくぜ」

ゼル兄ぃが氷った部分から手を離し、ヒュっと上に持ち上げる動作をした。

すると氷が飴のようにぐにゃりと、しかしすばやく鋭く変化し、上に持ち上がった。

もし、さっきその部分にいれば串刺しだっただろう。

「ま、おれっちは基本こんなみたく鋭くはさせないでグーをつくって殴るように使うけど」

「で、名前は？」

「いや、実はこれみんなのなんの変哲もないパンチとキックみたいな？通常攻撃だよ」

う～ん、すごいなあ、とフレアは思った。じゃあ技を使ったらどうなるんだ？

そういやあ、初めてあったときもエンペルトのハイドロカノンをレイトウビームで氷付けに、一瞬でしちゃったし。

「あ、ついたんじゃねえの、町に」

見ると、たくさん家がずらりとならんでる町へついた。

そして、あの刀店も右のほうにあった。

「あった、ゼル兄ぃ、行こう」

「ああ、ちょっとまって、腹いてえから便所いってくる」

ゼル兄ぃの顔が急に苦痛にゆがむ。

「うん、やっぱついてこなきゃよかった」

そういってコンビニに猛ダッシュに突っ込んでいった。

そんなゼル兄ぃはほっといて早速刀店に入るフレアであった。

「いらっしゃいませ」

入ると、すでに３０人近くのポケモンがいた。

すごいや、と思った。

前の店は僕しか店に来なかったしな。

時間もあるし、うろうろ歩いていくことになった。

最初は真剣がガラスケースに飾られていて、とんでもない値段で張り出されていた。

通路がたくさんあって、その通路の横にびっしりと真剣が並んでる。

入ってすぐにレジがあった。

奥へ進んでもずっと真剣ばかり。

誰がつくったかによって分けられている。

ほとんどが知らない人ばっかりだったが、たまたま剣さんの作ったやつを見つけた。

「やっぱすごいな、剣さん」

あんな落ち着いてて強い人がいればなあ、と思いつつ、真剣を一本とり値札をみた。

¥１２５０００

フレアは剣さんからもらったあの剣をとっとと売っぱらえばよかったと思った。

その後もぶらぶらとあたりを歩くいても、真剣ばかりが並んでていた。

あまりにも木刀がないので、店員さんに聞いた。

「ああ、あそこの傘たてにあるよ」

といわれた。

いってみると、数本の傘に混じって木刀が何本か乱雑にあった。

（みんなそんな木刀嫌い？）

そうおもいつつ、木刀に手を伸ばしたそのとき。

「フレア！」

ゼル兄ぃの声が響いた。

「え、なに？」

嫌そうな声で答える。

ゼル兄ぃが走ってこっちに来て、叫んだ。

「近くで銀行強盗が起こった！これは金儲けのチャンスだぜ。はやく強盗ぶっとばして謝礼金もらわねえとなヒャッハー」

うーん、趣旨が違うような気もするけど…。
それと周りの目がかなり冷たいけど…。

でも、救助隊として見過ごすわけにはいかない。

救助隊のスカーフをとりだし尻尾に巻き、適当に木刀を引き抜いた。

値札をちらりと見ると９９９９と書いてあった。

速攻でレジへいき、木刀を見せ１万円札を出し。

「おつりはいらないから！」

と、言って飛び出していった。

「はやくいくぜ」

ゼル兄ぃが後ろから走ってくる。

銀行のロビーで叫び声があがる。

「オラー！客は全員地べたにはりつけー！」

強盗のヤルキモノが左手にボコボコにした客1匹を掲げて叫ぶ。

客はいそいでひざまづく。

「かねだせコラ！」

ユンゲラーがバズーカ砲を構えながら銀行員に叫ぶ。

このバズーカ砲は、さっき入り口に大穴を開けたものだ。

それもそのはず戦争で使うバズーカだから。

これはゴローニャも岩の塊に変える威力半端ねーものだ。

銀行員はバタバタとあわてて金を用意する。

「あ、兄貴！」

そこへ一匹のぼろぼろのドゴームがロビーへやってきた。

「とんでもなくつぇーやつらが、２匹！入り口から襲ってきやした！救助隊のようで！」

「なに、もうかぎつけたか。ヤルキモノ、金とっておけ、おれが戦る」

バズーカにエスパーのエネルギーを溜める。

そして入り口にいこうとしたとき。

「おらぁ！」

「うわあああ！！」

天井を突き破ってゼル兄ぃがやってきた。

高さ５メートルもある天井から落ちてきたフレアは叫ぶ。

「だいじょぶだぜ」

ゼル兄ぃが両手をかざすと、銀行に壁が凍り始める。

空気をとおして壁にさわってその部分を凍らすゼル兄ぃの得意技だ。

そこから氷が伸びてきて、フレアを包むように手の形になり、フレアの尻尾を掴む。

ゼル兄ぃはそのまま下に向かってハイドロポンプをし、ゆっくり降りてきた。

「どーも、救助隊です」

ゼル兄ぃが言う。

フレアも氷の手に導かれ下に下りる。

「心眼流”炎剣”！」

買ったばかりの木刀の周りに炎が灯る。

（うん、やっぱ木刀はちょうどいいや）

ゼル兄ぃが地面に手を突き、凍らせる。

やがて変形しながらムチのようにするどくうなり、唖然としているヤルキモノに激突した。

「ぐぎゃ」

ヤルキモノはふっとんだ。

フレアはそのすきにさっきちょっと戦ったぼろぼろのドゴームめがけて走り、むこうが自分に気づいたときにはすでに斬りつけていた。

ドゴームは「ひでぶっ！」といってごろごろ転がりながら燃えた。

「まてっ！」

と声を上げるのはさっきのユンゲラー。

バズーカ砲を構えている。

バズーカの先はひざまずいている客に向けられている。

「少しでも怪しい動きをしたらこいつらを撃つ！」

叫び声が客から聞こえる。

「やめろ！」

フレアがユンゲラーにむかって走り出す。

「あ、バカッ！」

ゼル兄ぃが言う。

ユンゲラーはにやりと笑いフレアにバズーカをむける。

今、フレアの額のすぐにバズーカがむけられた。

「しまっった」

フレアが言うと急いで木刀を構えるが、バズーカの発射音が聞こえた。

「心眼流”悪吸”！！」

フレアの木刀が黒に包まれた。

そして、バズーカの弾を吸収する。

「え、」

「心眼流は心の目で戦う古き流派だ。炎、雷、悪をバランスよくつかいこなす」

フレアが言った。

バズーカのエスパーの弾は完全にフレアの木刀に吸収された。

「僕は、あなたを殴ろうとしません。お願いですから、ここから出て行ってください。そうすれば、今回の件はなかったことにします」

ユンゲラーはそれを聞き、力なくバズーカをおろす。

それを見てフレアは、ほっとし、ひさびさに勝ったと喜んだ。

うしろを向きゼル兄ぃを見る。

「あめーよフレア」

ゼル兄ぃは全力でこちらにかけてくる。

そのまま自分を追い越す。

わけがわからずまた後ろを振り返る。

さっきバズーカをおろしたはずのユンゲラーを見ると、自分に向けてバズーカ発射直前だった。

が、ゼル兄ぃがバズーカを手で掴み、銃口をフレアからはなす。

そのまま握力でぼろぼろに砕いてしまった。

「バーカ、おめえが言うことをきけばよ、うちのまじめ小学生の言うとおりに無傷ですんだのにな」

舌をだしながらゼル兄ぃは思い切りユンゲラーの顔面をなぐった。

ユンゲラーはそのまま壁にめりこんでしまった。

まあ、ゼル兄ぃは纏技を好むほうだったし、（レイトウビームやハイドロポンプも使ったけど）殴られたら自分ではひとたまりではないだろう。

「しかしよお、フレアさ、よくバズーカうけとめられたね」

銀行からは、天井とか壁とかめちゃくちゃにしてしまったために、「強盗に金を渡したほうがましだった」といわれ、お礼はもらえなくて文句をぶつぶつ言っていたゼル兄ぃがたずねてきた。

「ああ、あれはそういう技なんだ。”悪吸”って言うんだけど、エスパーの攻撃だったらそのエネルギーを吸い取れるさ」

フレアがそう説明してたら、例の刀店のお店の人がやってきた。

「き、きみ、木刀の値段足りないよ！」

マタツボミが、走ってきたせいか息を荒げ言ってきた。

「え、でもここに￥９９９９って書いてある…」

木刀をとりだしながらフレアは言ったが、そこで値札に違和感を感じた。

みると、値札が少し折られていた。

急いでめくってみると

『高級木刀￥９　９９９９』

と書いてあった。

そういえば、思い返してみると、あの時値札をみたとき、¥のマークがなくただ９９９９としかかかれてなかった。

「あ、もしかして折れていたのきづかなくて¥９９９９とおもったのかい？ごめんね、最近値札がちょうど１桁だけかくれるように折るいたずらがはやっててさあ」

「あ、そうでしたが、いやあ、じゃあ、お返しします」

恥ずかしさに堪えながら木刀を店員のマタツボミに渡す。

「あ、でもうちのみせ、返品はうけとらないんですよ。それはもう、中古品となってしまうのでね」

今度はフレアに大量の冷や汗が襲い掛かる。

「もし、お金がないのなら、うちではたらいてもらっても…」

たしか、フレアの記憶では貯金が３万あったはずだ。

さいしょにはらった1万で、9999円はらったとして残り9万。

そこから貯金の3万をかえすので、残り6万。

ゼル兄ぃが哀れみの目でこちらをみながら、ぽんと肩に手を置いた。

「じゃあ、バイトがんばれよ」

「……うん」

その日から、フレアの勘違いのせいで買ってしまった木刀のためのバイト生活が始まったのは言うまでも無い。

願い星（前書き）

すいません、また急いでやったので文章めちゃくちゃですが（いつもめちゃくちゃですが）本当すいません。
では、本編をどうぞ。

願い星

〇月×日

僕は１０００年の眠りから目覚めた。

しかし、これといっていいほどやることがない。

その日は災難で、ふらふら適当に町を歩いていると

周りからものめずらしそうに見られ、

不良にからまれたりした。

ぼくは願いをかなえるはずのポケモン、

戦い、他のポケモンを傷つけるのは好きではない。

確かに僕は世界で一匹のポケモン。

それをねたむものがいてもおかしくない。

その日は腐れた工場で、眠りに落ちた。

○月△日

昨日からなにも食べてないので、軽くバイトして食べ物を買った。

が、どうやら僕をつけていた人がいたらしく、僕が食べ物を食べようとしたすきに、

麻酔銃を撃たれ、眠りについた。

気がつくと、そこは人身売買みたいな、こうめずらしいポケモンの取引場で、危うく売られそうになったが、

そこへ一匹のワカシャモがやってきて、助けてくれた。

そのまま、うちにおいでといわれ、ご飯をもらい、寝床を用意してもらった。

〇月☆日

この日は昨日から眠れず、夜中の2時に起きてしまった。

そこへ、昨日助けてもらったワカシャモとミズゴロウの話声が聞こえた。

内容は、どうやって僕を使って金をもうけるかということと、

いっそならば殺してその死体を売り飛ばすかということ。

どうやら相手は、僕の姿を見て戦いは弱いとみたらしい。

僕は急いで空中に飛び、逃げ出した。

途中、奴らにみつかり炎の弾のピストルで背中を撃たれまくった。

それでもなんとか逃げ出し、気を失い倒れた。

数時間たち、まぶたが開いた。

はっと、周りを見たとき、きっと今度は大丈夫だろうと思った。

なんたって今倒れているのはポケ界議事堂のすぐそば。

きっと、王かその護衛が僕を助けてくれるだろう。

案の定、日本刀をもった王の護衛のようなガブリアスに気づかれた。

ガブリアスは急いで僕を担ぎ、議事堂の中へいれてもらった。

「王のアルセウスのバカに話したらややこしくなるしな」

そうガブリアスはつぶやき、自分の部屋らしき場所に入れてくれた。

やがてガブリアスが何匹かのポケモンを連れてきた。

リオル、ライチュウ、ジバコイルの3匹だ。

その3人もめずらしそうに僕を見て

「うん、確かにこれをアルセウスに話すと面倒だろう」

といって僕をかくまってくれた。

その日はずっと気をうしなっているふりをして、

安静にしていた

○月▲日

炎の熱で目が覚めた。

みると、議事堂全体が襲撃されていたようだった。

敵はきっと、僕が議事堂へいると知っていたから、

僕の能力は、なんでも願いがかなえられるから、

みんな、捨て身で、死んだって、僕を捕まえて、僕の願いを叶える能力で仲間に死んだらよみがえさせてもらえるように頼めばよみがえられるって思っているから。

でも、違う。

僕には確かに短冊はあるが、願いをかなえることはできない。

そんな能力はただの噂だ。

いそいで部屋から出て、状況を見た。

たくさんの掛け声と怒声が議事堂に鳴り響く。

さらにあちこちから炎が出てる。

敵一匹がちらりと僕をみた。

敵はどこかのマフィアらしく、拳銃をぶら下げていた。

敵は僕をみるやりにやりと笑いこちらにおっかけてきた。

僕は急いで空中に逃げるが、拳銃の炎の弾が何発かあったた。

「おい！」

王の護衛のポケモンのジバコイルがこちらへやってきて炎の弾からかばってくれた。

「ぐ、早く…」

ジバコイルがそういったので、僕は後ろを振り返りにげようとして、ぞっとした。

うしろにはすでに２０人くらいマフィアがあつまっていた。

そしてジバコイル側にも１０人くらいいる。

「早く逃げて！」

僕は近くの部屋へ入り込み、時が経つのを待った。

やがて、王のアルセウスと護衛たちによりマフィアは全滅した。

しかし、僕をかばってくれたジバコイルは

死んでしまったと聞かされた。

僕は王に呼ばれた。

周りには、残った護衛の人たちがいた。

王に言われた内容は、今すぐ出て行け厄病神っていうことと、

お前の能力を使ってジバコイルをよみがえらせろということだった。

でも、僕は、願いを叶える能力は単なる噂です、と正直にいった。

次の瞬間、あのガブリアスに日本刀できりつけられた。

彼は涙ながらに早く出て行け、さもなくば殺すと、言った。

他の周りの護衛たちも、ジバコイルの死を悲しんでいた。

僕は一人になった。

たぶん逆恨みだが、王がとても憎かった。

それに、１０００年前に目覚めた時は、みんな僕に対して優しかった。

家にとめてくれたし、ご飯も用意してくれたし、親切だったし。

安心して、１０００年の眠りにつくことができた。

あのころは、本当によかった。

今、この世の中は腐ってしまったのか。

とある町をとぼとぼ歩いていたら、今度は変なルンパッパたちに声をかけられた。

そのとき、思った。

どうせ一人なら、もう、全部ぶっ殺せばいいと。

味方なんていないなら、全部ただの敵だと。

戦いの嫌いな僕がおもったことだ。

「はめつのねがい」

僕のおなかにある閉じていた目が開眼した。

僕が町をでるころには、町のポケモンの死体の山ができた。

僕は、とても強かったのだ。

僕は、そうなったら、

あの王をぶっ殺して、

この世界を変えてやる、と思った。

欲にかられて殺しを行うポケモン

容姿で決め付けるものたち

かってに能力を想像し、裏切られたら攻撃するバカども

そして、攻めてきたマフィアより僕に対し怒る王

全部ぶっこわして、世直ししてやる

俺が…

そしてそう決意してから1週間たっても、俺は1000年の眠りにつくことができなかった。

普通の眠りにはつけるのだが

普通は目覚めてから1週間くらいで眠り、そのまま千年眠り続けるのだが、なぜか眠れない。

これは好機だとおもった。

今のうち、俺がこの世界を牛耳ってやる。

俺はそこで決めた。

マフィアの頂点にたとう。

理由は、それでかなりの兵力を得ることができるから。

そして、頂点に立ったあと、

王を殺し、俺が新たな王になり、世直しをする。

その日、俺は適当なザコマフィアのボスを倒し、

「お前のマフィアをトップにしてやる」

といった。

その日からは戦い、殺しを平気でやった。

2週間くらいでそのザコマフィアは今ではトップマフィアの3本指に入ることができた。

ある日、トップのマフィアの会合があると聞かされた。

いってみると2つのマフィアのボスがいた。

「私の名前は、ゼロ、ダークライのゼロだ」

トップ3のうちの一つのマフィアのボスがいった。

「わたくしは、スラーブ。エネコロロです」

同じく、もう一つのマフィアのボスがいった。

「あなたは、なんですか」

スラーブが、俺に聞いてきた。

「俺は、ジラーチ。てめえらをそのうち下っ端にするジラーチだ。よろしくぅ！」

まったく同時刻

とある病院

「〝剛〟だぜ」

「〝剛〟？」

病院のベットで寝ているレンにむかって、ゼル兄ぃはいった。

「ああ、そうだぜぃ。大蛇ちゃん操るには、剛っつう能力が必要だ」

ゼル兄ぃが淡々と言った。

「剛、かあ。聞いたときねえけど」

レンが首をひねっていった。

「レンはよお、王のアルセウスといっしょにいたとき圧迫感かんじたろ？」

あのとき、たしかに覇をつかっても圧迫感があり、その場にいるだけでつらかった。

「あれが剛だよ」

そういって、ゼル兄ぃが急に座り込んだ。

やがて、手を出してきた。

「剛っつうのは基本他の人にはわかんねえ」

ゼル兄ぃが持参してきた果物ナイフを取り出した。

そして、レンに言った。

「おれっちに覇をつかっている様子はあるか？」

そういわれて、自分も覇を使った。しかし、ゼル兄ぃから覇の気配はない。

「じゃあ、いくぜ」

ゼル兄ぃは急に自分の手に果物ナイフを突き刺した。

「オイ！…」

おもわず声を上げたレンだったが、

「ほら、刺さんねえだろ？」

果物ナイフはカンカン、といってゼル兄ぃの手からはじかれていた。

「これが剛。まあ、詳しくはレンが退院、あと3日後だっけ？してからね」

ゼル兄はそういって病室からでていった。

レンは急いで果物ナイフをてにとり、覇を使い、自分の手に果物ナイフを突き刺した。

「痛」

果物ナイフは貫通はしなかったが、ほんの微妙にレンの手に傷がついた。

「……おもしれえ」

レンはにやりと笑った。

ジラーチとゼロ（前書き）

すいません、前の話のジラーチが１ヶ月たっても１０００年の眠りにつけなかった、となってましたが、１週間の間違いでした。

では、本編をどうぞ。

ジラーチとゼロ

「はっはー、なんだ、こんなもんか」

ある森のなかで、ジラーチの声が響く

そしてジラーチの前にはぼろぼろのダークライ、ゼロがいた。

「いや、参ったね。いいさ、あんたがおれのボスだな」

やれやれとゼロは首を振った。

「ところでスラーブは？」

ジラーチはその質問にそっけなく答えた。

「ああ、殺しちまった」

ジラーチが指を指すと、そこに横たわっているスラーブがいた。

ゼロはちょっと驚いた。

スラーブは♀のエネコロロ。

たしかに力は弱いので、かなり特殊な戦い方をする。

たとえば、さいみんじゅつをつかうし、毒、麻痺、眠りの粉をなぜか覚えている。

まきびし、どくびしなど、そんなのも使う。

そして彼女の一番の強い技はねこのて。

しかも、彼女の首にはブレスレットがあり、

このリザードンが覚えている技は、かえんほうしゃ、じしん、ブラストバーン、はねやすめ。

そこには封印されているリザードンがいる。

スラーブがねこのてを使うと、この４つのうちどれかランダムにひ

とつつかえる。

けっして強くは無いが、それなりに長期戦にもつれこむだろう。

しかし、今、自分がこうなったのはつい3分前。

それは、ジラーチが急に2人のボス、スラーブとゼロをとある森へ集めた時だった。

最初ジラーチはスラーブを呼び、どこかへ行ってしまった。

ゼロはその場で待っていた。

1分くらいすると自分が呼ばれたので、行ってみるとこういわれたのだ。

『俺とバトルして、勝ったほうがボスな』

そしてその2分後、ゼロは降参して、今に至る。

「うーん、でもゼロにはめつのねがいはあんまり効いてないね」

ジラーチがぼそ、といった。

そう思うのも仕方ない。なぜならゼロは剛をつかうことができる。

だが、ゼロはジラーチの言葉の意味を解せなかった。

ゼロははめつのねがいでかなりの大ダメージを受けていた。

降参したのも、この威力をみたためだった。

「なあ、はめつののがいが効いてないって?けっこう痛いんだけど」

「ああ、はめつのねがいは身体だけじゃなく精神にもダメージを与えるんだ」

なるほど、とゼロは思った。

そのダメージは、剛を使い、またゼロには強い精神があったので精神攻撃は効かなかったわけだ。

「で、ボス、どうすんだこれから。なんか目的あんだろ？」

話を変える。

「ああ。そろそろ俺らのマフィア総動員して」

ジラーチはにやりと笑う。

「王をぶっ殺す」

その笑みをみてゼロは感じた。

こいつは化けると。

さっきのはめつのねがいは、ジラーチは覇や剛を使っていない、というか覚えていない。

しかし、ゼロは剛を覚えている。

それでもダメージをかなりうけた、となれば今からさらに強くなるかもしれない。

ただ、ゼロもまだ本気を出していなかった。

本気をだせばジラーチを殺すまではいかなくても倒せることはできたが、

そのかわり自分のなにかを犠牲にするだろうとおもいやめたのだ。

同時刻

「ただいま」

フレアが、間違って高い木刀を買ってしまい、お金をためるためのバイト地獄から、無事救助基地に帰ってきた。

「ん」

キルが返事した。

相変わらずカタカタとクチートがパソコンを使っている。

「キル、ゼル兄ぃは？っていってもきっとまた遊びいってるかあ」

そういってキルが座ってないほうのソファに腰をかける。

「で、どうなの？」

キルが聞く。

「ああ、終わったよバイト。なんとか働いたりさ、ゼル兄ぃにお金貸してもらったりしてさ」

「ゼル兄ぃが金貸した！？」

キルが驚いた。

「いや、でも3万借りたけどいつか3倍で返せって言われたけど」

「だ、だよね。利子つきか」

キルがふたたび座り込む。

「いよいよ明日だね」

フレアが木刀を布で手入れしながらいう。

「ああ、レンの退院ね」

キルが思い出すように言う。

うん、といってフレアは練習のため立ち上がり、外へ素振りしにいった。

「ガブリアスさん」

王の護衛の一人、リオルに呼ばれて我に返るガブリアス。

「おう、なんだ」

するとリオルはあきれていった。

「また、ジバコイルのこと思ってたんですか」

「ああ」

ジバコイルは2週間くらい前、ジラーチをおってきたマフィアやらに殺されてしまった。

ジラーチの訪問はキルがお金を受け取ってすぐに起きた事件だった。

そしてガブリアスはジバコイルの死を一番悲しんでた。

なぜなら彼は、王の護衛の中で一番恐そうで、ずば抜けて優しすぎる。

「もう新しいメンバーきてるんですから、もう忘れましょう。仕方ないです。仕事ですから」

「ああ」

（仕方ない、か）

ガブリアスは日本刀を抜き、リオルをきりつけた。

リオルは見切りでかわす。

「…なんですか」

リオルが少し切れ気味に聞く。

「わりい、お前さ、ちょっと焼きそばパン買ってきてよ」

「なんで！？」

開戦！―？（前書き）

すいません、頑張ってかいていたら長くなったので2回に分けます。

開戦！―？

「よし、今日から作戦を実行するぜ」

ジラーチが、巨大に膨れあがった自分のマフィアの部下たちを見下ろしながら言った。

場所は、もとスラーブのマフィアの隠れ家。

そこにジラーチのマフィアたち、ゼロ、スラーブの部下たちが全員いるためとてもせまく感じた。

広さもそこまではなく、体育館くらいだろう。

それに対しマフィアたちはいつのまにか１０００、１５００人はいるだろう。

思えば最初は誰かにすがりつきたかっただけだった。だれからも狙われ、嫌われた自分。

あの日王を殺すと決めた日、その日からまた長い年月がたった。

そして、今、大量のマフィアを手に入れ作戦を実行しようとする。

今のジラーチにあるのはとてつもない満足感と、これからへの期待感だった。

「作戦はこうだ。まず、王の目がつく町を襲撃する」

そういってジラーチは王の周りにある街を１０個さした。

幸い、ロストタウンは入ってなかった。

そのことにかんしては、ゼロにやめておけといわれたからだ。

「ロストタウンには救助隊がいっぱいいる。救助隊は強いやつも多い。数も多い。やめておけ」

そうして決まった１０個の町を襲い、王に挑戦状を売る。

相手がのってきて、王が単体でやってきたらそのまま殺し、違う、雇われた救助隊、護衛らが来たら全員倒し見せしめにしてさらに王を挑発させるというわけだ。

「そして無事、王を殺すことができたら、俺が王だ」

マフィアたちに喜びの声が起きる。

「そしたらすばらしい世界にしてやる。平等な世界、いじめのない世界、争いの世界、だれも涙を流さない世界を！！」

出撃1時間前になり、マフィアたちも武器を手入れしたり、戦ったりしているものもいた。

「なあ、ゼロ」

ジラーチの呼びかけに、ゼロが振り向く。

「なんだ？」

ここはゼロの部屋で、今、精神統一中だったゼロはそれを中断した。

「いや、ただこっちには兵の数が多いけど、強さはどうなのかな、って」

今までいろんなやつと戦ってきたが、いまいち、みんな強そうに無い。

そういうとゼロはちょっとまってな、といってどこかへ行ってしまった。

やがてゼロが戻ってきたときには、３匹連れてきた。

「こいつらはなかなか強いよ。リエーフ、スカル、ラーク。俺の部下だ」

現れたのはそれぞれ、ウェンディ、ドラピオン、キングラーだ。

「……では、ボス、ちょっと用事があるので」

ウェンディのリエーフは、ジラーチに顔を見せると早速後ろを振り

向きどこかへ行ってしまった。

ジラーチはその態度にぽかんとする。

（なんだ、あいつ）

「あー、すまんな。結構おとなしそうに見えて自己中だからあいつ」

ゼロがわびるように言う。

これでジラーチの機嫌を損ねたら厄介だ。

「ふーん。じゃあ、残りの2人の力量が見たいな」

幸い、リエーフの態度には気にしてなかった。

ただ、とにかく強さをみたかったのだ。

ジラーチにいわれて早速、ドラピオンのスカルは自分の尻尾をジラーチに向けて振り回した。

ムチのように尻尾はしなり、ジラーチに空を切って襲い掛かる。

ジラーチは危険をさっちし、空中へ逃げ出す。

「スピードスター」

空中にとびながらジラーチの手から、無数の星が現れる。

スカルはその一連の速さに驚いた。

もちろん、攻撃の動作に入っていたので、今からの方向転換は困難だ。

「守る」

そのスカルをかばうようにしてキングラーのラークがスピードスターを守るではじく。

「一閃・氷迅」

スピードスターがやんですぐ、キングラーがはさみをジラーチにむけ、そこからレーザーのように氷を出す。

氷のレーザーはすごい勢いでジラーチに迫る。

「あぶね」

ジラーチはひらりと横へかわす。

そして、天井でボコン、と音がした。天井にキングラーの技が突き刺さったのだ。

(ち、そういやあ俺あんまり防御とか考えてなかったなあ。自分が攻めてそれで終わりだったからな)

多分、あれにあたっていたらかなりのダメージを受けるだろう。

キングラーが次はもう片方ではさみをかまえている。

(いや、ダメージってそういやあ本当に経験がないか?襲われたときぐらいか…)

次の一閃・氷迅、氷のレーザーもなんとかかわした。

自分は鋼タイプだったし、よけいに防御は考えてなかった。

（やはり防御も必要か…。守るや見切り…それよりも相手の攻撃に耐えられる耐久力、防御、特殊防御）

（確かに基礎的なことを俺はやっていない。はめつのねがいにしか頼ってなかったし…課題ができたな）

「ＯＫ分かった。強さはな。よし、じゃあ頼むぞ」

ジラーチの課題をジラーチ自身で見つけたことに気づき、ゼロは戦闘を強制的に終わらした。

（よかった、あいつがはめつのねがい使わなくて。そこまでバカじゃないか）

そしてちなみに今呼ばれたゼロの部下３匹も剛の使い手だ。

「じゃあな、スカル、ラーク」

ジラーチが言った。

ラークは小さな声で「イエス、ボス」と言った。

「はい、ボス！」

スカルがいきなり大声を上げた。

ラークはささささと帰ってしまった。

「私はいつでも貴方についていきますよ！どうかわれらのボス！王を討ち、英雄であらんことを！」

…まあこんなやつもいるんだな、とジラーチは思った。

（ところでこの1時間で俺にできること、なんだ？）

あとでゼロに聞いてみようと思った。

とある部屋。

そこで悩みにふけるポケモンが一匹。

（俺はマフィアでいて正しいのか？）

「なあ、リュウ！」

「ん、ああ」

リュウと呼ばれたモココが返事した。

「なんだよ」

「いや、さっきから呼んでんだよ」

リュウ、とよんだマッスグマが言った。

「リュウさ、いい加減にしてよ。しょうがないでしょ。わたしたちは昔は英雄の兵士の一員、今じゃマフィア。うん、悩んでもしょうがない。戦うことだけ専念するの」

「ああ、わかった」

モココのリュウはうなずく。

（どうする？今のボスはとても強いし、どうやって抜け出す…）

元、スラーブの部屋。
現、スラーブの墓

「スラーブ様…」

フライゴンが、スラーブの死を悲しみすすり泣く。

そのビブラーバの脇にブニャットが現れる。

それにしてもずいぶんと立派な体形のやつだ。

「っは、ほっとけ。やつはもう死んだ」

ブニャットがくるりとうしろを向きながら言う。

その瞬間、ブニャットの首が飛んだ。

鮮血がブニャット驚いている顔からあふれ出る。

首にはみずてっぽうのように血が飛び出す。

「…裂空」

フライゴンはそのままブニャットの死体を踏み蹴り、逃げるように

その場から離れた。

「よし、じゃあ始めっか」

ゼル兄ぃが屈伸しながら言う。

ここは、この前フレアが木刀を買った町と同じ町。

そこに道場があったので今日は貸し切ることにした。

そしてゼル兄ぃの目の前には退院したばかりのレンがいた。

「おし！さあ、教えてくれ。剛ってやつを」

久々に自由に動けるレンはうずうずしていた。

するとさっそくゼル兄ぃがかがんだ。

「まあみてな」

ゼル兄ぃがかがみ、身体が高速で一回転する、

と、同時に蹴りを入れる。

すると、蹴りにあわせてレンの裂空のような、しかしとても大きく、半月型のはどうだんのようなものがでた。

「うおっ！」

レンは急いでよける。

やがてゼル兄ぃの裂空のようなものは道場のたたみにあたった。

そしてたたみはぱっくり割れてしまった。

衝撃音を上げながら。

「あ、やべ」

「あー、ゼル兄ぃ弁償だ」

いつのまにかきていたキルが言う。

そしてフレアは道場の隅っこで木刀を素振りしていた。

「…まあいいや。で、今のがおれっちの技、『月斬』」

「…読み方は？」

「『ムーンサルト』。でも、これはレンの裂空とは違うよ。いちおうおれっちの月斬は自分で操作できるんだ」

なるほど、とレンは思った。

「そしてなぜ、レンが大蛇を操れないか、答えは簡単、大蛇は剛の使い手だから」

「そして裂空も剛の技、だろ。俺の裂空は未完成なんだろ？」

レンが言う。

「そ、よく気づいたね」

「いや、異常にために時間かかるからさ」

「まあね、剛は覇と違って身体のすぐ内側にエネルギーで包む。ようするに、皮膚のすぐ裏側にエネルギーがびっしり包まれている。だから、攻撃力や防御力がとても上がる」

覇、のように身体の外でエネルギーを覆うとエネルギーが逃げてしまう。

しかし、剛は内側に覆うので、逃げずに、覇よりも大きく攻撃力、防御力があがるのだ。

果物ナイフのときがいい例だ。

「そして裂空や一閃、これらは剛では基本技とされている。まあ、勝手に身体が使えるようになってんだ。ああ、一閃っていう技はレンはしらないか。まってな」

ゼル兄ぃは手のひらを構える。

「一閃」

するとゼル兄ぃの手のひらからエネルギーがたまり、ビームのように発射された。

ゼル兄ぃの一閃はそのまま今度は道場の壁に突き刺さった。

そして壁を貫通し、空へと消えていった。

「あー、ゼル兄ぃまた弁償だ」

キルが言う。

ゼル兄ぃはキルを無視して続けた。

「ま、こんな感じだ。今のが基本技。そして、応用技がある」

「さっきのゼル兄ぃの月斬みたいな？」

「そ、応用技は一人一個だけ、自分のオリジナル技を作ることができるんだ。ルーズの隊長だって応用技を一つ覚えている」

それを聞いてレンは興味がわいた。

裂空より強い技がある。

「あのトップ３のプクリン、フレアーズ、斬とかの救助隊は、ほとんどみんな剛を覚えている」

「どんな能力？」

「うーん、あんま教えちゃ駄目なんだけどね、プクリンはすごいよ」

そういうとゼル兄ぃはレンに向かって拳を突き出す。

しかし、何も起こらない

「でも、プクリンが今のようにやったらレンは吹っ飛んでるよ」

「まじか！」

「ああ、アルセウスも剛を使ってる。圧迫感じたろ？あれもあいつの能力さ」

フレアがふん、ふん、と言って木刀を振り回している。

「ま、おれっちはそんな能力つくんのめんどくさいからさ、裂空を足で出すやつでいいやと思ってさ」

「で、その剛はどうやって覚えるんだ？覇を覚えるのは覇を使うやつに殴られれば覚えたけれど」

「うん、で、覚え方はね…」

そこまでゼル兄ぃが言った時

キャアアアアアアアアアア！

突然悲鳴が鳴り響いた。

開戦！―？

「なんだ、今の叫び声」

レンが首をかしげる。

「レン、おい」

上を促すゼル兄ぃ。

すると道場の天井がつきやぶれた。

天井からは、太陽が照りまぶしく一瞬ひるんだ。

「あれ、もうお昼だ」

フレアが太陽が真上にあったため、そんなことを言った。

そしてその突き破れた天井の奥に

ダークライが見えた。

が、ダークライはこちらに気づかず、すぐにふわりと宙に浮き、どこかへ行ってしまった。

「なんだ?今の?」

レンが言う。

そして次は、どこかの方向から爆発音がなり、また悲鳴が連鎖する。

さすがにおかしいと思うレン。

「ゼル兄ぃ、やっぱなんか…」

「とにかく外だ」

4匹は急いで入り口から脱出を図った。

入り口に拳銃をもったニドリーナがいたが、

ゼル兄ぃが殴って気絶した。

そして、外にでるとあちこちでドンパチしていた。

町のいたるところに火がつけられていた。

道には絶命したひとたちが転がり、

命乞いしているものもいた。

そしてあのダークライが、ほかにもいろいろな場所を破壊している。

「なんじゃこりゃ？」

様子を見た感想をレンが言う。

「あ、あの店！」

フレアが声を上げる。

見ると、この前フレアがかった刀店が燃えていた。

「店長ぉぉぉぉぉぉぉ！！」

フレアが叫ぶ。

「なに？テロ？」

キルが不安げに言う。

「おい！」

後ろから声がした。

みると、謎のゲンガーがこちらに銃を向けている。

そのすぐ後ろには、すでに１０匹ほどいる。

「なにをやっている！この場でひざまずけ」

フレアが怒って飛び出そうとするが、ゼル兄ぃにとめられる。

「いいか、早く誰かに連絡しな。剣さんでいい。ちょっとあいつらぶっころす」

ゼル兄ぃが前へ出た。

「行くぞ」

レンがいい、3人は走り出した。

「キル！テレポートで斬の救助隊へ行ってろ！俺は戦ってくるから」

「うん、わかった」

キルがテレポートしようとする。

「レン、僕どうすれば…」

「じゃあ俺と来い！」

キルがテレポートした。

それにしても状況はひどい。

走っていくたび、倒れたり、血しぶきをあげたり、形がわからなくなったりしているポケモンがいる。

そしてその道をどうどうとあるくなぞの集団。

その集団をレンとフレアは気絶させるまで戦う。

すでに１４体、合計して倒した。

フレアもこの状況に混乱していたが、なんとか木刀を振る。

「まちな」

後ろで声がした。

サイホーンがこちらにむかってとっしんしてくる。

「フレア、やれ」

レンが命じる。

するとフレアはジャンプしてサイホーンをとびこし、後ろをとる。

「心眼流”炎剣”！」

燃える剣をサイホーンにぶつける。

が、もちろんきかず、はじかれる。

「くそ、やっぱいわタイプは無理」

そういっていったん間をとる。

「ほらいくぜー！」

サイホーンがすぐにまたとっしんしてきた。

「裂空！」

が、レンの裂空により、足が切り裂かれてしまった。

「んぐ！」

サイホーンは倒れこむ。

「や、や、ああ、やめろ！すまなかった！」

サイホーンがレンにむかって命乞いをする。

「じゃあ、聞く。なにが目的だ？」

そう、レンがいったとき、レンの顔面に拳銃の弾が当たる。

「って」

見ると、今度はポリゴンが２０匹ほどこちらに拳銃を構えている。

『ポリゴン隊、はむかうものを発見。処理します』

そんなことお構いなしにサイホーンは叫ぶ。

「も、目的は町を破壊してアルセウス、王をおびきよせ、そのままし
まつするのが目的だ」

「じゃあてめえらのボスはどこだ」

右のほうからまた爆発音が聞こえた。

『くらえ！』

ポリゴンが拳銃の引き金を引く。

「させるか！」

その拳銃をフレアがはじく。

（こういうザコは僕でも倒せそうだ。武器にたよっているって感じだ。あのときのアリゲイツの１００００分の１の強さだな）

フレアはそのままつぎつぎとポリゴンたちをなぎ払っていく。

「ぼ、ボスは、中央！この町の中央でこの様子を眺めている」

フレアと戦っているポリゴンは、残り７匹。

と、いってもみんな戦意喪失しているが。

「じゃあ、最後の質問だ。てめえらはなんだ？」

「ま、マフィアだ！答えたぞ！助けてくれ！」

必死に叫ぶサイホーン。

それを聞き、ゆっくり立ち上がるレン。

「フレア、終わったか？」

「うん、なんとか」

拳銃の弾を一発くらい、そこがとても痛いが、殲滅した。

（ふ～ん、強くなったな、フレア）

「じゃ、フレア。このサイホーンどうするかはお前に任せる。でも、あぶなくなったら逃げろよ」

そういって、レンは町の中央に向かって走り出した。

「いやあ、いい景色だ」

町の真ん中に立っている大きい杉の木のてっぺんに座りながら言うジラーチ。

杉の木を中心に半径５０メートルくらいの広場になっている。

広場はレンガに敷き詰められていて、杉の木をとりかこむようにベンチがある。

ダークライは次々建物を破壊しているし、

リエーフは町を燃やしているし、

残りの奴らは、住民の殲滅に測っているし。

「さ、王はこないかな」

あくびしながらジラーチは言った。

と、そのとき

「裂空！！」

と声がした。

衝撃音がなり、杉の木が真っ二つに折れた。

「およ？」

ジラーチは空中に飛び、そのまま地面へ着地した。

杉の木は轟音を立てて並んでいる家に激突した。

「なんだ、お前」

ジラーチはいい気分だったのに邪魔された怒りで聞いた。

「おれか、救助隊ホッパーズ副隊長レンだ。お前は？」

レンがゆっくりと聞く。

「そうだな、次期王とでも答えておこう」

（なんだ、こいつ）

これが、レンの初対面の感想だった。

（みたこともねえな、こんなやつ。短冊なんかたらしやがって）

（なんか、エネルギーが、そう、大蛇だ。大蛇を感じるぞ、こいつから）

ジラーチは３０００年前に大蛇とあったことがある。会ったというか、見た、というか。

（そのときに感じたエネルギーと奴は似ている。なんか関係あるのかな）

やがて2人は間合いをつめた。

お互いに、拳が届く距離までつめた。

（なにを考えてやがる）

「メガトンパンチ！」

レンがジラーチのおなかをめがけて殴りつける。

「リフレクター」

が、エスパーでできた壁にあたってしまうだけだった。

（なるほど、防御技も便利だな）

するとレンはかがみこみ、でんこうせっかでジラーチの後ろにまわりこもうとする。

が、ジラーチは空へ浮き上がる。

（ち、飛べんのかよ）

そのままジラーチは手のひらをレンに向ける。

「スピードスター」

瞬間、無数の、それもとてもひとつひとつ大きい星の固まりがレンにむかって落ちてくる。

「おいおい、これのどこがスピードスターだよ」

そういって見切りで丁寧にかわしていく。

そして最後をかわし終わった瞬間、はどうけんをはなつ。

ジラーチははどうだんに気づかずに直撃してしまった。

「がはっ！」

ジラーチは腹を抱えてさらに空中へ進む。

（一発でけっこうきいたな。けっこうよわっちいな。でもこいつがボスらしいしなあ）

レンが考える。

「レン！」

後ろから声がする。

見ると、フレアとゼル兄ぃが広場の近くにある崩れた民家に身を隠していた。

「速く逃げるぞ、無理だ。数が多すぎる」

「待て、こいつがボスらしいんだ」

レンはふりむかずに言う。

（なんだ、仲間も集まってきやがった。邪魔しようって言うのか？

俺を？）

いや、それよりもよくも俺に攻撃をあてたな。そして正義面して俺にはむかう気か？ふざけるな。俺が正義だ！

「お前、ゆるさねえ。死ね！はめつのねがい！」

びっくりしてレンがジラーチをみると、おなかにある第３の目が開いていた。

そして宇宙から、エネルギーが飛来し、一瞬でレンのもとまでやってきた。

「なんだ、これは」

レンの周りの地面にあたり、あたった地面はめくりあがり、美しいレンがで敷き詰められていた地が粉々になった。

そのエネルギー弾がだんだんレンの近くまで降ってきた。

そしてあたった地面はゆっくりめくりあがる。

そしてついにレンの真上に振ってきた。

みきりでかわす

しかし、次の瞬間レンの頭がふっとぶような思いがした。

そしてなぜか悲しくなり、涙が目からあふれた。

（こいつは、精神攻撃…！まずい）

そのままひざから崩れ落ち、仰向けに倒れ、意識が薄らいでいく…

「レン！！」

フレアが叫ぶ。

しかし、エネルギー弾は幸いにもレンにはあたらなかった。

敗北…？（前書き）

みなさん、お久しぶりです。ほんと
もう実はそろそろ高校受験なので、勉強やら学校が伸びるやらでパ
ソコンをやる機会がなくなってしまい、とても遅れてしまいました。
すいません（ー＿ー；）

敗北…？

「レン！」

暗闇の中からフレアの声がした。

というよりは、ついさっき目覚めた。そしてまだ目を開けてない。

反射的にレンは半開きに目を開ける。

「レン！」

ぼんやりとフレアの輪郭が現れる。

彼を認識したと同時にある思考に襲われる。

俺は今まで何をしていたのだろう、と。

突然頭痛と吐き気が襲う。

「レン？レン、起きたの？」

フレアの声色が不安げからうれしそうに変わる。

レンは今度ははっきりと目をあける。

「ああ」

吐き気を押さえ込みかろうじて答えた。

そして疑問をなげかける。

「どこだ？ここは」

天井の壁を見る。見覚えが無い。

フレアがすかさず答える。

「どこって、僕らの基地だよ。レン、大丈夫？」

はっとなって身体を起こす。

その時わかったが間接が痛い。

急いで周りを見る。確かに、いつもと同じ光景だ。

「レン、僕、レンの兄ちゃんのルーズ隊長から聞いたんだけど、精神攻撃に弱いの？」

フレアが早口で問う。

「なんか、小さいころルーズ隊長から冗談半分で実験台とか言われて無理やり精神攻撃されてたって」

べらべらべらけっこう恥ずかしいことを話す。

いい加減にしてほしいのとあんまりうるさいので手で制す。

「まて、まて、みんなは？ジラーチは？」

フレアはそこでしゃべるのをやめ、え？とバカみたいに聞き返す。

きょとんとした顔に一発殴ってやろうかと思ったかが、きもちを抑える。

「お前さ、俺さ、今目覚めたばっかでさ、状況がサハラ砂漠の砂粒の数並みにわかんねえよ」

また横になるレン。しかし、余計なことを言ってフレアに無事ということをアピールする。

頭痛がとてつもなく激しい。

精神攻撃の特徴だ。

負の感情が脳の働きを鈍くし、感覚器官の働きも悪くなる。

フレアは「あ…」といって頭を下げる。

「あ、ああごめん。そいうやそうだね。あれは覚えているでしょ？ジラーチのはめつのねがい」

もちろん、そこまで覚えている。それを直接受けなかったが、なぜか自分はこうして精神を攻撃された。

推測だが、地面に落ちたはめつのねがいがはじけて、それを受けてしまったと考える。

しかし、はじけてもなお、とびちるエネルギー。
それは関心するほどの高エネルギーだろう。
フレアはレンの思考を気にせず続ける。
「そしたらレンさ、その技全部よけたのに倒れててさ。急いで僕とゼル兄ぃで助けにいったんだ」
ゼル兄ぃはなんだかんだ言って俺に心配をかけすぎている。それは、あいつも俺の精神攻撃の弱さを知っているから。
レンは短く答える。
「ああ」
レンの応答を受けて小さくうなずき、フレアはまだ続ける。
「そのあと、あのジラーチも身体が痛くなったらしくて、そしたらダークライがやってきて、『引くぞ』って言ってどこかいっちゃったんだ」
ジラーチが身体を痛めた。
レンはそれを考えた。
ジラーチは俺が倒れたあとからだを痛めた。
もしかしたらはめつのねがいの後遺症か？

だとしたら数発しか打てないはずだ。

いや、でも挙動が怪しくなかった。

普通、反動や自分がダメージを受ける技を使うときは、そのポケモンは顔や行動に拒否の表情が現れる。

つまり、あいてを集中してみれば、あいての反動技を見抜くことができる。

反動技はきわめて威力が高いので、よけるとなればダメージが違ってくる。

だから、あの時もジラーチを注意してみていて、大技をよけようとしていた。

しかし、ジラーチは通常技をだすようにあのはめつのねがいをうってみせた。

と、なると身体を痛めたのはもっと別な理由がある…？

残りの方法で考えられるのは、あのとき俺がうったはどうだんしかない。

それ以外考えられない。まさか朝ごはんの生卵が腹にあたったとか？

だとしたらまぬけだ。

「ああ」

フレアはレンがだまりこくっていたので心配そうに見ていた。

それにレンは気づき、とりあえず返しておいた。

フレアはレンの反応を確認して続ける。

「僕らは急いでレンをここに連れてきたんだよ。そしたら隊長のルーズが待っててさ、レンは僕が見張ることになって、のこりのみんなはアルセウスに呼ばれていなくなっちゃった」

もし、本当にはどうだんでダメージをうけたとなれば、奴の弱点は防御力の弱さだ。

たしかに、それかもしれない。リフレクターがいい証拠だ。

はがね、がついているのにリフレクターは不自然だ。

エスパータイプはからだが弱いから使うのがわかる。

しかし、やつははがねをもっている。

いくら格闘攻撃に弱くても、そこまではしない。

アルセウスの収集に気になったが、レンはフレアに納得したというように返事をする。

「そうか」

なんとなく状況がよめたところで、吐き気が強まった。

レンは急いでトイレに駆け込む。

後ろでフレアが心配そうに「…レン」とつぶやいているのが分かった。

そんなレンの状態を見て、フレアはルーズ隊長が言っていたことを思い出した。

『レンは精神攻撃に弱い。なぜって?俺が小さいころからレンに精神攻撃の練習台にしていたら、よっぽどトラウマで弱点になっちまったみたいだ』

ゼル兄ぃはルーズがいないときに言った。

『だから俺っち、隊長はあんますきじゃねえんだよ。だってよ、俺っちはレンを一番のダチだと思ってんだけどな』

ゼル兄ぃがこんなことうんだ、と裏で笑った。

「あー、参ったぜ」

レンはトイレに出ながらいった。

これじゃあ戦えそうにない。エネルギーがおもうように出ない。

なんだかんだいって自分を心配してくれていたフレアがまだいた。

礼をいうのもらしくないので当たり前のことを聞いた。

「お前ももうじきいくんだろ？アルセウスのとこに。そしてジラーチ討伐だろ？」

フレアははっとなってこっちを見る。

考え事をしていたようだ。

「…うん」

その表情に不安を隠しきれてなかった。

おれが、あいつに負けたからびびってんのか？

いいや、俺はまだ負けてねえ。

「アルセウスのところいって、作戦会議するんだって。だから、僕もいかなきゃ」

そうやらフレアは俺が目覚めるまでわざわざ残ってくれたのか。

精神ぐらぐらのレンに些細なフレアの優しさに無駄に感動した。

フレアが今度は楽しげに言う。

「トップ3の救助隊のうちの2つ、斬とフレアーズの救助隊も来てるんだって」

斬は、剣さんや翔らがいる、フレアもしっている救助隊だ。

フレアーズは…。まああそこの隊長は俺は嫌いじゃないけどな。

「そうか、フレアーズもか。なるほど」

思わず口に出てしまった。

「フレア、悪いけどとっとと出てってくんないか。今、一人になりたいんだ」

フレアを見ずに言う。

そうして、自分の切羽詰った感を見せる。

めずらしく、あのクチートもアルセウスの元にいっているようだ。

フレアは、レンになにか一声をかけようとしている。

やがて決意したように言う。

「僕は、レンが強いこと知ってるよ」

レンは聞かないふりをする。

「だから、すぐさ、来てね」

フレアは玄関に行った。

あとで、玄関のドアの閉まる音が聞こえた。

同時に、なんだかなきたくなってきた。

そのまま沈黙して1分、レンのまぶたの裏には、大蛇の暴れる様が見えた。

やがて大蛇はギラティナへと変わっていった。

宣戦布告

ポケ界議事堂に着いたフレア。基地の外でキルが待機していて、すぐにテレポートでつれてきてくれた。

キルはレンの様子を聞いてこなかった。

まあ、聞けないとは思ってたけど。

今、議事堂の1階のよくわからん広い部屋にいる。

議事堂を入ってすぐ右の通路をだーって歩いた奥のほうにあった。

広いといっても学校の教室2つ分くらいだ。

真ん中にテーブルがずっしりと置いてあり、その周りを囲むようにソファがおいてある。

入り口からみて右のほうにいるのはゼル兄ぃやら隊長やらクチートやらのいる我らホッパーズ。

奥のほうにいるのが、剣さんがいるので多分救助隊斬。

で、真ん中のテーブルを分捕っているのがなぞのバシャーモ、ウィンディ、ポニータ。

多分こいつらがフレアーズ。

１０分後、王であり神でありのアルセウスから指令が出されるので、とりあえず新人フレアは救助隊の知らない人たちに自己紹介をした。

キルもフレアより救助隊の世界へ入るのが早かったが、フレアーズなど知らないポケモンばかりなので同行した。

まず、救助隊斬へ

と、いっても剣さんがいたので楽にできた。

メンバーも知っている人たちばかりだった。

剣、翔（エルレイド）、　凛（キレイハナ）

そして隊長の刃というなのカモネギだった。

「よろしくでござる」

と、いきなり言われたのでちょっと引いたが。

それにどうやら刃は年配のようだった。

剣さんが言うには、「俺がござるとか侍口調で言ってのは刃さんがそういうからなんだっけー」だそうだ。

でも、翔や凛はそんなことなく現代語でしゃべってた。

しかし凛は「剣さん大好き」しか言ってなかったけど。

「残りのやつらはみんな基地にいるよ」

と翔に言われて思い出した。

そういや、斬のメンバーっていうのはたくさんいて、たしか１００人くらいの人数だったとか（匹？）

そして次はフレアーズに挨拶するわけだが、なんか嫌だ。

いや、知らない人だったこともあるが、さっきからバシャーモが叫びわめいてる。

それも、テーブルに置いたパソコンに向かって。

フレアがよこからちらりとみると、ヤフー知恵袋だった。

『空が飛べなくて困ってます。もう、このままでいいのかな…　投稿者　タツベイ』

と書いてあった。

それを見ているバシャーモはずっと「あきらめちゃだめだ！いつかは夢はかなうんだあああああ！！」

と叫んでいる。

キルをみると、さすがに帰りたさそうな顔をしている。

フレアが、ここはいいかな、といおうとしたとき、ソファに座っていたウェンディが声をかけてきた。

「どうしたんっすか」

フレアはもごもご答えた。

「え、ああ。えと、フレアです。いや、その自己紹介というか、初めてお会いするので…」

ウェンディは答えた。

「そうっすか。自分はジョウっす。で、こっちはポニータのポーちゃんっす」

ポニータがこっちを見てぺこりと頭を下げる。

「で、あれが自分らの隊長っす」

ウェンディのジョウがバシャーモの名前を見て言う。

「ヒートっていうんっす。いつもあんなかんじっす」

つまならそうにいうジョウ。

キルももごもご自己紹介をした。

ジョウは言った。

「ところで今日はレンはきてないんっすか。あいつは隊長のお気に入りなんっす」

それにフレアは少なからず驚いた。

レンはどっちかっつうとぶっきらぼう。

しかしこの人は松岡修三みたいなやつだ。

馬が合うのか、フレアには分からなかった。

やがて、モニターが入り口側に降りてきた。

みんながそちらを向く。

やがて部下のガブリアス（剣をもったあのポケモン。１２話参照）がやってきて、プロジェクターを置いてある程度準備した。

ゼル兄ぃの隣に来ていたフレアは、つんつんと肩をたたかれた。

ふりむくとゼル兄ぃがこっちを見ていた。

（レンはどうだった？）

口パクで言う。

（う～ん、あんまりよさそうではないかな）

フレアがそう返す。

ゼル兄ぃはそれからうつむいてぶつぶついったあと、「ちょっとトイレ」といって部屋から出て行った。

やがて、フレアはクチート、キルとともに議事堂をあとにした。

そのほかには、斬の翔、凛、フレアーズのポーちゃんだった。

なぜなら、今回、もうアジトを発見したためジラーチを今日討伐しようとなり、

戦うものは『剛』を使うもののみということだった。

理由は、相手が強すぎるから。

ホッパーズなんてはまだ子供がいるし、それに相手は平気で殺しをするやつらだ。

あいても剛を使う奴もいるし、無駄にこちらも死人を出したくない。

と、いうわけで剛を使えないものたちはこう、のこのこ帰っていくのだ。

ホッパーズは隊長とゼル兄ぃが行くわけだ。

フレアは今回の戦いに混ざれなくていいと思った。

それは、相手がいままでと違うから。

まえの戦闘では、いくら年上だからといって一匹の会社員のアリゲイツだった。

確かに戦闘で特殊な技を使ったが、今回は殺すためめの能力を使うやつがごろごろいる。

フレアは実は恐怖心いっぱいだったのだ。今回は気軽にいけない。いくら剣を修行したって、通用するか分からない。

キルのテレポートでフレアとクチートは基地へ戻る。

クチートが鍵をあけ、中に入る。

その時、中の様子をみて違和感を感じた。

フレアは急いで玄関に入り、居間へ行く。

そのあとトイレにいき、風呂場にいき、押入れにいった。

クチートとキルはなんだなんだと見ていた。

やがてフレアは息を切らしながら言った。

「レンが、いない！」

キルは、え、というように言った。

「そりゃ、レンだって外にいくときゃあんじゃん。考えすぎだよ」

クチートは携帯をいじってる。

考えすぎ、か。

フレアは考えを変えた。

しかし、こういうパターンはそんなことといって、もうレンがあいてのアジトへいっているんじゃね、と思った。

フレアの思考は正解だった。

スラーブのアジト（今はジラーチのアジト）に二匹のかげがいた。

それは門番のブービックとチャオブーだった。

アジトはちゃんとした豪邸だった。その門をダブル豚が守っている。

そこに現れたのも二匹だった。

ブービックがそれを認識する瞬間、

レンの裂空で切り裂かれた。

チャオブーが隣の急な異変にあれって思ったとき、氷の塊が頭を直撃した。

ドサ、と二匹は同時に倒れた。

「いや、まじできちゃったよ」

レンがそういったとき、門が急に開き、ポケモンが5、6匹出てきた。

「いや、俺ノイローゼ状態だよ。グロッキーだよ、ほんと」

レンが少し後ろに下がる。身体が震える。

「じゃあ黙ってみてな」

ゼル兄ぃはそういうと、敵軍に突っ込んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7276l/

救助隊ホッパーズ

2011年10月7日03時32分発行